





波岩

昭和二年十一月十五日印刷  
昭和二年十一月十五日發行

古今和歌集 ★★  
定價四十錢

岩波文庫  
159-170

校訂者

尾上八郎

發行者

東京市神田區南御保町十六番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目  
菊地眞次郎

發行所

東京市神田區  
南御保町十六番地

岩波書店

電話九段二一〇九番  
振替東京二六二四〇番

株式會社秀英印刷

庫 文 波 岩

169—170

集 歌 和 今 古



## 嘉祿本 古今和歌集

古今和歌集は、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀友則に仰があつて、選ばしめられた歌集である。これが出来てから、後々に、勅撰歌集が相續き、古今集を加へて二十一部、いはゆる二十一代集が作り上げられた。

平安朝時代になつて、漢詩文の製作が盛になつた。且つ上にも嵯峨淳和二天皇の如き、好文の君があらせられたので、それらを選んで一書を作るべく、文學の士に命ぜられた。これで、我が國ではじめて、勅撰詩集が現はれた。この事は、嵯峨天皇の御時の弘仁から、淳和天皇の天長までに三度もあつた。この三集は、凌雲集、文華秀麗集、經國集である。

しかるに、その後おひ／＼歌が多く試作せられた。外國の文學の形式を襲ふよりは、自國の語を用ゐ、調により、自己の懷抱を、殊更に支那化せしめずに、素直に發表する方が、どのくらゐ樂であり、且つ趣があるかもしれない。知らず識らず起つた自覺的態度は、日に日に歌の隆盛を來した。

以上の故で、勅撰詩集でなく、勅撰歌集を編纂すべき勅命が下つて、延喜年間に古今集は出来上つたのである。選者の一人の紀貫之は序文を書いて、「貫之らが、この世に生まれて、この事の時にあへるをなむ喜びぬる。人麻呂なくなりたれど、歌のこととまされるかな。」と喜んで、更に、「歌のさまをも知り、事の心を得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。」と云つた。古は、貫之らよりいふ古で、専ら奈良朝を指し、今は、自分らの時代、乃ち延喜の御世を云つた。實に、此集を讀んで、自分らは、天邊の大月を仰ぐが如く、延喜の聖代をしのび、貫之等諸歌人の風姿を想見するのである。

古今集は、貫之等の手によつて成つて、奉獻せられたのである。この最初のもものは、従つて民間には止まらぬわけである。しかし、古寫本は種々ある。それは、貫之の自筆といふものが首で、道風、佐理、行成、公任、俊頼、顯輔、清輔等の筆といふものが引きつゞく。平安朝時代の有名な書家及び歌人の手に寫されたといふ古今集は實に多い。しかし大抵斷片となつて存在して、世にはゆる古筆愛好者によつて、尊重せられてゐる。これらの中で、俊頼の筆といふものと同様な元永三年の奥書のもものが最も完全で、三十卷整つてゐて、價値の多いものである。清輔の書寫といふものも、これに次ぐべきであらう。

しかし、今日世に流布してゐるものは、以上のものでなくして鎌倉時代の初期に、藤原定家が、貞應二年七月に書寫したものである。このものは、二條家に傳へて、證本とした。この二條家が、定家の後を正しく受けたものであるから、定家が尊崇せられるとともに、その宗家所傳の本は尊重せられ、従つて流布せられて、今日、古今集といへば、専らこれをいふこととなり、大抵の教科書、又註釋書は、これによつてゐるのである。今日は、古今集すなはち貞應本の状態である。

定家の子の爲家から、定家の家は三つに分れた。乃ち二條家、毘沙門堂家、冷泉家である。毘沙門堂家はやく跡を絶ち、二條家と冷泉家とが、續いた。その兩家は、自づから競争の位置に立つた。この故に、兩家用ゐるところの本も、異なるに到つた。

定家は、すでに述べた貞應年間に、古今集の定本を作つたが、嘉祿二年四月にも、また一の證本を作つた。前者を貞應本と云ふと等しく、世に後者を嘉祿本と唱へた。二條家が前者を用ゐるとすると、その反對の位置にある冷泉家は、勢嘉祿本を用ゐることとなつた。

しかし、二條家は榮えて、その門流が廣がつたに反して、冷泉家は、特に花々しいところがないかつた。従つて、貞應本は、廣く用ゐられるに反して、嘉祿本は、書寫の範圍も甚だ狭く、殆んど世上に現はれてゐない有様であつた。今日に於いても、この状態は、變らずにある。



貞應本に比べて、嘉祿本が特にいゝと云ふのではない。定家が同じやうに校合したのであるから、異なるところが多いわけはない。しかし、少差はおのづから存する。これも、筆者の寫誤と認められないところもないが、また参考に供すべきものもある。これらをよく對照して見たならば、學者は、益するところが多いであらう。その異なるところは、専ら字句であるが、その歌に限つて、大凡を擧げて見れば（圈點は嘉祿本、括弧内は貞應本）左のやうである。

うつ（うゑ）しうへば秋なき時やさかざらん花こそ散らめ根さへかれめや

紅葉は袖にこきいれてもていでむでなむ秋はかぎりと見む人のため

あかずして別るゝ袖のしらたまをは君がかたみとつゝみてぞゆく

北へゆく雁ぞなくなるつれてこし數はたらずでぞかへるべらなる

するがなる田子の浦波たゝぬ日はあれども君をこひぬ日ぞなきはなし

風ふけば峯にわかるゝしらくものたえてつね（つれ）なき君が心か

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもるとみるがわびしき（さ）

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色物（物）にぞありける

夏引の手びきの糸をくりかへしことしげくともた（た）えむと思ふな

我身から憂き世の中となづけ(なげき)つゝ人のためさへかなしかるらむ  
 かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば(みれば)そでぞぬれける  
 篠の葉におくはつしもの夜をさむみしみはつくとも色にいでめやは(いでめや)  
 郭公けさなくこゑにおどろけば君を(が)わかれし時にぞありける

あふくまは霧立ちくもり(わたり)あけぬとも君をばやらじまてばすべなし  
 兩者いづれがいゝであらうか。學者は猶よく比較せられたい。

今日世間に、あまり貞應本ばかりが流布せられてゐるので、今こゝに、家藏の嘉祿本を公にし  
 てみる。假名使も、送假名も、漢字も、大體原本通にして見た。たゞ「磯上」、「いその神」、「松  
 人」、「松」等の戲書は、「いそのかみ」、「待つ人」、「待つ」等に直した。「劍」、「南」も、「けん」、  
 「なん」と改めて見た。又變體假名も、平假名に變へて見た。濁點と句讀點とは、讀者の便を計  
 つてつけて置いた。原本の眞面目を知らうとする人は、これらを本にかへし、或は取り去つて見  
 られたいのである。

昭和二年八月末日

校訂者しるす



古  
今  
和  
歌  
集



やまとうたは、人のこゝろをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。世中にある人  
 ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るものきくものにつけて、いひいたせる  
 なり。花になくうぐひす、水にすむかはづ（やじり）のこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれか  
 うたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をも  
 あはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものゝふの心をも、なぐさむ  
 るはうたなり。このうた、あめつちのひらけはじまりける時より、いできにけり。あまうら  
きはし  
したにて、女神を神となりたまへることをいへるうたなり。しかあれども、世につたはることは、ひきかたのあめにしては、し  
 たてるひめにはじまり、したてるひめとは、あめわかみこのめなり。せうとの神のかたちを、かたににうつりてか  
がやくをこめるえびすうたなるべし。これらは、もじのかずもさだまらずうたのやうに  
もあらぬことあらかねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける。ちはやぶる神世  
 には、うたのもじもさだまらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世とな  
 りて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともしはよみける。すさのをのみことは、ちよ  
てるおほむ神のこのかみな  
り。女とすみたまはんとて、いづものくに、宮づくりしたまふ時に、その所に、やいろのくものたつ  
を見て、よみたまへるなり。やくもたついでもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを。かくてぞ、花を  
 めで、とりをうらやみ、かすみをあはれび、つゆをかなしぶ心ことばおほく、さまざまにな  
 りにける。とをき所も、いでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、たかき山も、ふ

もとのちりひぢよりなりて、あまぐもたなびくまでおひのほれるがごとくに、このうたも、か

くのごとくなるべし。なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり。おほさゝきのみかどの、なにはづにて、みこときこえ

ける時、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、みとせになりければ、玉仁といふ人の、いぶかり思て、よみてたてまつりけるうたなり。この花は、梅の花をいふなるべし。あさかやまのことば、

うねめのたはぶれよりよみて、かづらきのおほきみを、みちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女、かはらけとりて、よめるなり。これにぞ、おほきみの心とけにけ

る。あさかやまかけさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものは。このふたうたは、うたのちゝはゝのやうにてぞ、てならふ人のはじめにもしける。そもく、うたのさまむつなり。からのうた

にも、かくぞあるべき。そのむくごのひとつには、そへうた、おほさゝきのみかどをそへた

てまつれるうた。

なにはづにさくやこの花冬ごもりいまははるべとさくやこの花、といへるなるべし。

ふたつには、かぞへうた。

さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて、といへるなるべし。

これ花のたぎりとこゝいひて、ものにたとへなどもせぬ物也。このうた、いかにいへるに、あられ。その心えがたし。いつとにたとごとうたといへるなむ、これにはかなふべき。

みつには、なずらへうた。

きみにけさあしたのしものおきていなばこひしきごとనికిえやわたらむ、といへるなるべ

し。これは、ものにもなすらへて、それがやうになむある、とやうにいふ也。このうた、よくかなへりとみ見えす。たゞちめのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいはにあはずて、かやうなるや、これにはかなふべからむ。よつには、たとへうた。

我わがこひはよむともつきじありそ海のはまのまさこはよみつくとも、といへるなるべし。

これは、よろづのくき木、とりけだ物につけて、心を見するなり。このうたは、かくれたる所なむなき。されど、はじめのそへうたとおなじやうなれば、すこし、さまをかへたるなるべし。すまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり、このうたなとや、かなふべからむ。

いつには、たゞごとうた。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし、といへるなるべし。

これは、事のととのほり、たゞしきをいふ也。このうたの心、さらかなはず。とめうたとやいふべからむ(山ざくらあくまでいろを見つるかな花ちるべくも風ふかぬ世に)

むつには、いはひうた。

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり、といへるなるべし。

これは、世をほめて、神につぐるなり。このうた、いはひうたとはみえず、むある。かすがのにわかになつみつよらぶ世をいはふ心は神ぞしるらむ。これらや、すこしかなふべからむ。おほよそ、むくさにわかれんことは、えあるまじき事事になむ。

今の世の中、いろにつき、人の心花になりけるより、あだなるうた、はかなきことのみいでくれば、いろごのみのいへに、むもれ木の人しれぬこととなりて、まめなるところには、

まめなる



花すゝきほにいだすべきことにも、あらずなりにたり。そのはじめをおもへば、かゝるべく  
 なむあらぬ。いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さふらふ人々  
 をめして、ことにつけつゝ、うたをたてまつらしめ給。あるは、花をこふとて、たよりなき  
 ところにまどひ、あるは月を思とて、しるべなきやみにたどれる、心くを見たまひて、さ  
 かし、をろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さどれいしにたとへ、つくば  
 山にかけて、きみをねかひ、よろこび身にすぎ、たのしび心にあまり、ふじのけぶりによそ  
 へて人をこひ、松虫のねに友をしのび、高砂、すみの江のまつも、あひをひのやうにおほえ、  
 おとこ山のむかしを思いで、をみなへしのひとときをくねるにも、歌をいひてぞなくさめ  
 ける。又、はるのあしたに、花のちるを見、秋のゆふぐれに、このはのおつるをき、ある  
 は、としごとに、かぐみのかげに見ゆる雪と浪とをなげき、草のつゆ、水のあわを見て、我  
 身をおどろき、あるは、きのふはさかえをこりて、時をうしなひ、世にわび、したしかりし  
 もうとくなり、あるは、松山の浪をかけ、野なかの水をくみ、秋はぎのしたばをながめ、あ  
 かつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるは、くれ竹のうきふしを人にいひ、よし野河をひき  
 て、世の中をうらみきつるに、今は、ふじの山もけぶりたゞずなり、ながらのはしもつくる

なり、ときく人は、うたにのみぞ心をなぐさめける。いにしへより、かくつたはるうちにも、  
文武天皇 ならの御時よりぞ、ひろまりにける。かのおほむ世や、哥の心をもしろしめしたりけむ。か

のおほむ時に、おほきみつのくらゐ、かきのもとの人まろなむ、うたのひじりなりける。こ  
 れは、きみも、人も、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、龍田川にながるゝもみ  
 ぢをば、みかどのおほむめに、錦と見たまひ、春のあした、よしのゝ山のさくららは、人まろ  
 が心には、くもかとのみなむおほえける。又、山のべのあか人といふ人ありけり。うたにあ  
 やしくたへなりけり。人まろは、赤人がかみにたゝむ事かたく、あか人は、人まろがしもに

たゝむことかたくなむありける。

ならのみかどの御うた、龍田川もみぢみだれてながるありわたらばにしきな  
 かやたえなん。人まろ、梅のはなそれともみえず久かたのあまぎる雪のなべ

てふれゝば。ほのゝとあかしのうらのあさざりにしまかくれゆく母をしぞおもふ。赤人、春のゝにすみれつみにとこ  
 しわれぞ野をなつかしみひとよねにける。わかのうちにしほみちくればかたをなみあしべたさしてたづなきわたる。こ

の人々ををきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとのよりくに、たえ

ずぞありける。これよりさきのうたをあつめてなむ、万えふしふとなづけられたりける。こ

こに、いにしへのことをも、うたの心をもしれる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあ

れど、これかれ、えたる所、えぬ所たがひになむある。かの御時よりこのかた、としはも、

とせあまり、世はとつきになむなりにける。いにしへの事をも、うたをも、しれる人、よむ

人おほからず。いまこのことをいふに、つかさくらゐたかき人をば、たやすきやうなればいれず。そのほかに、ちかき世にその名きこえたる人は、すなはち、僧正遍昭は、うたのさまはえたれども、まことすくなし。たとへば、ゑにかけるをうなをみて、いたづらに心をうごかすがごとし。

あさみどりいとよりかけてしらすつゆをたまにもぬける群の柳か。はちすばのにぐりにししぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく。さが野にてむまよりおちてよめる。名にめでよおれるばかりぞをみなへしわれおちに

と人にかたるな。

ありはらのなりひらは、その心あまりて、ことばたらず。しぼめる花の、い

ろなくて、にほひのこれるがごとし。

月やあらぬ聲やむかしの春ならぬ身ひとつはもとの身にして。おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの。ねなるよの

夢をはかなみまどろめばいなはかなにもなりまさるかな。ふむやのやすひでは、ことばたくみにて、そのさま身におはず。い

はゞ、あき人のよききぬきたらむがごとし。

吹からにのべのくさ木のしほるればむべ山かぜをあつしといふらむ。深草のみかどの御國忌に、草深き淵の谷にがけかくして

る日のくれしけふ。宇治山の僧きせむは、ことばかすかにして、はじめをばり、たしかならず。

いはゞ、秋の月を見るに、あかつきのくもにあへるがごとし。

わがいははみやこのたつみしかぞすわよをらぢやまと人はいふなり。

よめるうたおほくきこえねば、かれこれかよはして、よくしらず。をのよこまちは、いにし

へのそとほりひめの流なり。あはれなるやうにてつよからず、いはゞよきをうなの、なやめ

る所あるにたり。つよからぬは、をうなのうたなればなるべし。

思つゝぬればや人の見えつらむゆめとしりせばさめざらました

いらみえでうつろよものは世の女の人のこゝろの花にぞありける。わびぬれば身をうき草のねをたえてこそふ水あら

大

伴のくろぬしは、そのさまいやし、いはゞ、たきとおへる山人の、花のかげにや。

とし。思いで、こひしきときははつかりのなきてわたると人はしらずや。 鏡山にきたちよりて見てゆがむとしへぬる身は老やしぬると。 このほかの人々、その名きこゆる、

直作の日記

のべにおふるかづらのはひよろこり、はやしにしげきこのはのごとくにおほかれど、うたと

のみおもひて、そのさましらぬなるべし。かゝるに、いま、すべらきのあめのしたしろしめす

こと、よつ御の事の時こゝのがへりはなむなりぬる。あまねきおほむうつくしみのなみ、やしまのほ

かまでながれ、ひろきおほむめぐみのかげ、つくば山のふもとよりもしげくおはしまして、よ

ろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろくのことをすてたまはぬあまりに、いにしへの

ことをもわすれじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、今も見そなはし、のちの世にもつ

たはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記きのともり、御書のところのあづかりきのつ

らゆき、さぎのかひのさう官おふしかうちのみづね、右衛門の府生みぶのたどみねらにおほ

せられて、万えふしふにいらぬふるきうた、みづからのをもたてまつらしめたまひてなむ。

それがなかに、むめをかさずよりはじめて、ほととぎすをきよ、もみぢをおり、雪をみるに

いたるまで、又つるかめにつけて、きみをおもひ、人をもいはひ、秋はぎ、夏草を見てつま

をこひ、あふさか山にいたりてたむけをいのり、あるは、春夏秋冬にもいらぬ、くさぐさの

うたをなむ、えらばせたまひける。すべて、千うたはたまき、なづけてこきむわかしふといふ。かくこのたび、あつめえらばれて、山した水のたえず、はまのまさごのかずおほくつもりぬれば、いまは、あすか河のせになるうらみもきこえず、さどれいしいはほとなるよるこびのみぞあるべき。それまぐらことば、春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋のよのながきをかこてれば、かつは人のみにおそり、かつは、うたの心にはぢおもへど、たなびくものたちゐ、なくしかのおきふしは、つらゆきらが、この世におなじくむまれて、この事の時にあへるをなむ、よろこびぬる。人まろなくなりたれど、哥のこととまされるかな。たとひ、時うつり、事さり、たのしび、かなしび、ゆきかふとも、この哥の、もじあるをや。あをやぎのいとたえず、松のはのちりうせすして、まさきのがつら、なかくつたはり、とりのあと、ひさしくとまれば、うたのさまをしり、ことこの心をえたらむ人は、おほぞらの月をみるがごとくに、いにしへをあふぎて、今をこひさらめかも。

古今和歌集卷第一

春哥上

ふるとしに、春たちける日よめる

年のうちに春はきにけり一とせをこそとやいはむことしとやいはむ

はるたちける日よめる

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

題しらず

春霞たてるやいづこみよしのよしの山に雪はふりつ

二条のきさきの、はるのはじめの御うた

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらず

梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつ

よみ人しらず

在原元方

紀貫之

よみ人しらず

雪の、木にふりかゝれるをよめる

素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

題しらす

心ざしふかくそめてし(お)りければきえあへぬ雪の花とみゆらむ

ある人のいはく さきのおほきおほいまうちぎみのうた也

二条のきさきの、とう宮のみやすん所ときこえける時、

正月三日、おまへにめして、おほせごとあるあひだに、

日はてりながら、雪のかしらにふりかゝりけるをよま

せ給ける

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

雪のふりけるをよめる

霞たち木このめも春けの雪ふれば花なきさと花ぞちりける

はるのはじめによめる

春やとき花やをそきときゝわかむ驚だにもなかずもあるかな

ふぢはらのことなお言置

春のはじめのうた

みぶのたぶみね

はるきぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりありきはあらじとぞおもふ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

源まさすみ近石大臣男

谷風にとくる氷のひまごと物同にうちいづる浪や春のはつ花

紀ともものり

花のかを風香のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべ車水作しめるにはやる

大江千里

鶯の谷よりいづるこゑなくば春くることをたれかしらまし

在原棟梁

春たてど花もにほはぬ山里は物物うかるね物に鶯ぞなく

題しらす

よみ人しらす

野べちかくいへ春作し住み居ればむしせれば鶯のなくなるこゑをあさなくきく

かすが野はけふはなやきそ若草若のつまもこもれり我もこもれり

春日野のとぶひのとぶひもりいでとぶひみよ今かいくありてわかなつみてん



香

山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわか  
なつみけり

梓弓あしゆみをして春雨はるあめけふふりぬあすさへふらばわか  
なつみてむ

仁和にげのみかど、みこにおましくける時に、人にわか

なたまひける御うた

君がため春のゝにいでゝわか  
なつむ我衣手に雪はふりつゝ

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつ

れる つらゆき

かすがのゝわか  
なつみにや白妙しらたかの袖そでふりはへて人のゆくらん

寛平御時、きさいの宮の哥合によめる 源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつ

れる つらゆき

我せこが衣はるさめふるごと  
にのべのみどりぞ色まさりける

あをやぎのいとよりかくる春はるぞみだれて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる

あさ緑いとよりかけて白つゆを玉にもぬける春の柳（か）

題しらず

よみ人しらず

百ちとりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく  
をちこちのたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥哉

かりのこゑをきよて、こしへまかりける人を思てよめる

る

凡河内躬恒

春くれば鴈歸なり白雲の道ゆきふりに事やつてまし

歸鴈をよめる

伊勢

春霞たつをみすて、行鴈は花なき里にすみやならへる

題しらず

よみ人しらず

折つれば袖こそにはほへ梅のはなありとやこゝに鶯のなく

色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅（も）

やどちかく梅の花うへじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり

外にあり

整飾  
ぬける  
柳（か）

新註

梅花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみぬる

梅花をよりてよめる

源常左大臣左大将藤原源氏實衡元年壽四十四  
東三条左のおほいまうちきみ

鶯の笠にぬふといふ梅花折てかざむおいかくるやと

題しらず

素性法師

よそにのみあはれとぞみし梅花あかぬ色かは折てなりけり

むめの花をよりて、人にをくりける  
とものり

君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる

くらぶ山にてよめる  
つらゆき

梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有ける

月夜に、梅花をおりて、と人のいひければ、おるとて

よめる  
みつね

月夜にはそれともみえず梅花かを尋てぞしるべかりける

はるのよ梅花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくる

はつせにまうづるごとに、やどりける人の家に、ひさ

しくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの

家のあるじ、かくさだかになむやどりはある、といひ

いたして侍ければ、そこにたたりける梅花をよくりて

よめる

づらゆき

人はいさ心もしらずふる里は花ぞむかしのかに、ほひける

水のほとりに、梅花さけりけるをよめる

伊勢

春ごとにながる、川を花とみておられぬ水に袖やぬれなん

年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家に有ける梅花のちりけるをよめる

くるどあくどめかれぬ物を梅のほないつの人まにうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の哥合のうた、ゆるまき

梅が、袖にうつしてとよめてば春はすぐともかたみならまし、あ

素性法師

ちると見てあるべき物を梅のはなうたて句の袖にとまれる

題しらず

よみ人しらず

ちりぬともかをだにのこせ梅花こひしき時の思いでにせむ

人の家にうへたる櫻の、花さきはじめたりけるを見て

よめる

つらゆき

ことしより春しりそむる櫻花ちるといふ事はならはざらん

題しらず

よみ人しらず

山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ

又はさとよをみ人もすさめぬ山ざくら

山櫻わが身みにくれば春霞嶺にも嶺も立かくしつゝ

清和後白河太子太皇太后宮 昌泰三年正月一日崩七十二忠仁公女  
そめとのよきさきのおまへに、花がめに櫻の花をさゝ

せたまへるをみてよめる

さきのおほきおほいまうちきみ 忠仁公

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をのみれば物思もなし

なぎさの院にて、さくらを見てよめる

在原業平朝臣

世中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

題しらず

いしはしる瀧なくもがな櫻ばなたをりてもこむみぬ人のため

山のさくらをみてよめる

見てのみ色人にかたらむ櫻ばなてごとに折て家づとにせむ

花さかりに京を見やりてよめる

みわたせば柳櫻をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける

櫻の花の本にて、年のおいぬる事をなげきてよめる

色もかもおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

おれる櫻をよめる

誰かもとめて折つる春霞たちかくすらむ山の櫻を

哥たてまつれ、とおせられし時に、よみてたてまつ

れる

櫻花さきにけらしな足引の山のかひよりみゆる白雲

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

とも の り

みよしのゝ山べにさげる櫻花雪かとのみぞあやまたれける

やよひにうるふ月ありける年、よみける

勢

櫻花春くはゝれる年だにも人の心にあかれ伊勢はせぬ玉の助勢

さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人の、

きたりける時によみける

よみ人しらず

あだなりとなにこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり散り

返し

なりひらの朝臣

けふこずばあすは雪とぞふりなましきえずは有とも花と見ましや

題しらず

よみ人しらず

ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそ櫻おらばおきてめ

折とらばおしげにもあるか櫻花いざやどかりてちるまではみむ

きのありとも

櫻色に衣はふかく染てきむ花のちりなむのちのかたみに

櫻の花のさけりけるを、見にまうできたりける人に、

よみてをくりける

み つ

ね

我やどの花みがてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき

亭子院哥合の時よめる

伊

勢

みる人もなき山里の櫻花外のちりなむ後ぞさかまし





古今和歌集卷第二

春哥下

拾題しらす

春霞はるのつゆたなびく山のさくら花うつろはむとや色いろかはり行く

まてといふにちらでしとまる物ならば何を櫻に思まさまし

残なくちるぞめでたき櫻はなばなありて世中よのなはてのりければ

この里このさとに旅りねしぬべしさくら花はなちりのまがひまがひに家いへち忘わすて

うつせみの世よにももにたるか花はなざくらさくと見みしまにかつちりにけり

僧正へんせうによみてをくりける

これたかのみこ惟善文徳第一

櫻花はなちらばちらちらなんちらずとてふるさと人のきても見みなくに

雲林院にて、さくらの花のちりけるをみてよめる　そうぐ法師承均

さくらちる花の所は春ながら雪ぞふりつゝきえがてにする

櫻の花のちり侍けるをみてよみける

そせい法師

花ちらす風のやどりは誰かしる我にをしへよ行てうらみむ

うりむ院にて、さくらの花をよめる

そうぐ法師

いざくら我もちりなんひとさかり有なば人にうきめ見えなん

あひしれりける人の、まうできてかへりにけるのちに、

よみて花にさしてつかはしける

つらゆき

ひとめ見し君もやくると櫻ばなけふはまちみてちらばちらなん

山のさくらをみてよめる

春霞なにかくすらむ櫻花ちるまをだにもみるべき物を

心ちそこなひて、わづらひける時に、風にあたらじ、

とておろしこめてのみ侍けるあひだに、おれる櫻のち

りがたになれりけるを見てよめる

藤原よるかの朝臣

たれこめて春の行あもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり

東宮雅院にて、さくらの花の、みかは水にちりてなが

待賢門北王庫

奥侍貞觀寛平延喜

れけるを見てよめる

すがのゝ高世

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ

さくらはなの、ちりけるをよみける つらゆき

ことならばさかず中はあらぬ櫻花みる我さへにしつ心なし

櫻のごとくちる物はなし、と人のいひければよめる

さくら花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風も吹あへぬ

櫻の花のちるをよめる きのともものり

久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

春宮のたちはきのちんにて、さくらの花のちるをよめ

る 藤原よしか せ良風

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ

櫻のちるをよめる 凡河内みつね

雪とのみふるだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹らむ

ひえにのぼりて、かへりまうできてよめる つらゆき

山たかみ見つゝ我こし櫻ばな風は心にまかすべらなり

題しらす

大伴一本くるぬし

春雨のふるは涙かさくら花ちるをおしまぬ人しなれば

亭子院哥合のうた

つらゆき

櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞ立ける

ならのみかどの御うた

平城天皇也大同天子

ふる里となりにしならの宮こにも色はかはらず花は咲けり

春のうたとてよめる

よしみねのむねさだ

花の色は霞にこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かせ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

そせい法師

花の木も今はほりうへじ春たてばうつろふ色に入ならひけり

題しらす

よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかざる花のみゆらん

はるのうたとてよめる

つらゆき

みわ山をしかもかくすヤコウモか春霞人にしられぬ花やさくらむ

ふりむるんのみこのもとに、花見に、きた山のほとり

にまかれりける時によめる

いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花の影かは

春のうたとてよめる

いつまでかのべに心のあくがれん花しちらずばちよもへぬべし

題しらず

よみ人しらず

春ごとに花のさかりは有なめとあひみむ事はいのちなりけり

花のごとよのつねならばすくしてし昔は又もかへりきなまし

ふく風にあつらへつくる物ならばこのひと本はよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花を折てけるかな

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかせ

さく花はちくさながらにあだなれど誰かは春を怨はてたる

春霞色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

在原元方

かすみたつ春の山べはとをけれど吹くる風は花のかぞする  
うつろへる花を見てよめる

み つ ね

花みれば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそしれ

題しらず  
よみ人しらず

鶯の鳴野べごとにきてみればうつろふ花に風ぞ吹ける

吹風を鳴で怨よ鶯は我やは花に手だにふれたる

典侍治子朝臣寛平延喜朝東所別當

ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは

仁和中將のみやすん所家に、哥合せむとしてしける時

にみける

藤原のちか後産藏人右少將  
子中納言右譽子

花のちる事やわびしき春霞たつたの山の鶯のこゑ

鶯の鳴をよめる

せ い

こづたへばをのがは風にちる花を誰におほせてこゝらなくらん

木

羽

買

うぐひすの、花の木にてなくをよめる み  
 するしなきねをも鳴かな驚のことしのみちる花ならなくに つ  
 ね

題しらず よみ人しらず

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花を何かうらみむ世中に我身もともにあらん物かは

小野小町

花の色はうつりにけりな徒にわが身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に、哥合せんとしける時

救うる そ  
 によめる せ  
 い

おしど思心はいとによられなんちる花ごとにぬきてとよめむ

しかの山ごえに、女のおほくあへりけるによみてつか

はしける つ  
 ら ゆ  
 き

梓弓春の山邊を越くれば道もさりあへず花ぞちりける

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた



春のよにわかになつまむとこし物をちりかふ花に道はまどひぬ  
山でらにまうでたりけるによめる

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける

寛平の御時、きさいの宮の哥合のうた

吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花は見ましや

しがよりかへりけるをうなどもの、花山にいりて、ふ

ぢの花のもとにたちよりて、かへりけるによみてをく

りける 僧正へん ぜう

そにみてかへらん人に藤花はひまつはれよ枝は折とも

家に、藤の花のさけりけるを、人のたちとまり見ける

をよめる み つ ね

我宿にさける藤浪立かへりすぎがてにのみ人のみるらん

題しらす よみ人し ら ず

今もかもさきにはふらむ橘のこじまのさきの山吹の花

春雨にほへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきの花  
 やま吹はあやなあやないさきそ花みむとうへけん君がこよひこなくこなくに

よしの川のほとりに、山吹のさけりけるをよめる づらゆき

吉野川岸の山吹ふく風にそこのかげさへうつろひにけり

題しらず よみ人しらず

かはづなく井での山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

この歌は、ある人のいはく、ちちばなのきよともが歌也。

清友贈太政大臣兼卿后女

春の哥とてよめる そ せい い

おもふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしが

春のとくすぐるをよめる み つ ね

梓弓春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな(早く経つことか)

やよひに、鶯のこゑの、ひさしうきこえざりけるをよ

める つ ら ゆ き

なきとむる花しなければ鶯もはては物うくなりぬべらなり

やよひのつごもりがたに、山をこえけるに、山川より

花の流けるをよめる

ふ か や ぶ

花ちれる水のまに、く<sup>かひて</sup>とめくれば山には春もなくなりけり

春をよしみてよめる

も と か た

おしめどもとどまらなくに春霞歸道にも立ぬとおもへば

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

お き か ぜ

こゑたえずなけや<sup>や</sup>鶯ひとよせにふたよびとだにくべき春かは

やよひのつごもりの日、花つみよりかへりける女ども

をみてよめる

み つ ね

とどむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにとぐふ心か

やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折

て人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつゝぞしみて折つる年の内に春はいくかもあらじとおもへば

亭子院哥合のはるのはてのうた

み つ ね

けふのみと春をおもはぬ時だにも立ことやすき花の陰かは



古今和歌集卷第三

夏 哥

題しらず

我やどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

よみ人しらず

このうた、ある人のい く、柿本人麿が也。

う月にさけるさくらをみてよめる

紀 と し さ だ

あはれてふ事をあまたにやらじとや春にをくれて獨さくらん

よみ人しらず

答詞 題しらず

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなんこそぞのふるごゑ

伊

勢

さ月こば鳴もふりなん郭公まだしき程のこゑをきかばや

よみ人しらず

あはれてふ事をあまたに

五月

山郭公

（布衣）

よみ人しらず

さ月まつ花橘のかをかけば昔の人の袖のかぞする

いつのまにさ月きぬらむ足引の山郭公今ぞなくなる

けさきなきいまだ旅なる郭公花橘にやどはからなん

をと山をこえける時に、時鳥のなくをきよてよめる 紀 友 則

をと山けさこえくれれば郭公こずゑはるかに今ぞ鳴なる

郭公の、はじめてなきけるをきよてよめる そ せ い

郭公はつこゑきけばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた

ならのいその神でらにて、郭公のなくをよめる

いそのかみふるき都の郭公こゑばかりこそむかしなりけれ

題しらず よみ人しらず

夏山になく時鳥心あらば物おもふ我にこゑなきかせそ

郭公鳴こゑきけば別にし舊里さへぞ戀しかりける

時鳥ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ものから

思いづるときはの山の郭公唐紅のふりいでぞなく

秋こゑはして涙はみえぬ郭公我衣手のひづをかからなむ  
 葦引の山郭公折はへて誰かまさるとねをのみぞなく  
 今更に山へかへるな時鳥こゑの限は我やどになけ

みくにのまち

やよやまで山時鳥事づてむ我世中にすみわびぬとよ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

紀 友 則

さみだれに物おもひをれば郭公夜深くなきていづち行らん

夜や暗き道やまどへる時鳥我やどをしも過がてになく

大江千里

やどりせし花橘もかれなくになど時鳥こゑたえぬらん

つ ら ゆ き

夏のよのふすかとすれば郭公なく一こゑにあくるしのよめ

みぶのたどみね

くるゝかともればあけぬる夏のよをあかずとやなく山時鳥



紀 秋 岑

夏山にこひしき人やいりにけむこゑふりたてなく郭公

よみ人しらず

こぞの夏鳴ふるしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ

郭公のなくをきよてよめる

つ ら ゆ き

五月雨の空もとどろに郭公なにをうしとかよたどなくらん

さふらひにて、をのこどものさけたうべけるにめして、

郭公まつうたよめ、とありければよめる

み へ ね

時鳥こゑもきこえず山びこは外になくねをこたへやはせぬ

山に郭公のなきけるを、きよてよめる

つ ら ゆ き

郭公人待山になくなれば我うちつけにこひまさりけり

はやくすみける所にて、時鳥のなきけるをきよてよめ

る

た ど み ね

昔<sup>昔</sup>べや今もこひしき時鳥故郷にしもなきてきつらむ

郭公のなきけるをきよてよめる

郭公我とはなしに卯花のうき世中になき渡るらん

はちすの露をみてよめる

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかほ露を玉とあざむく

月のおもしろかりける夜 あか月がたによめる

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづくに月やどるらん

となりより、とこ夏の花をこひにをこせたりければ、

おしみて、この哥をよみてつかはしける

ちりをだにすへじとぞ思さきしよりいと我ぬるとこ夏の花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋と行かふそらのかよひちはかたへ涼しき風や吹らん

み つ ね

僧正へんぜう

ふ か や ぶ

み つ ね



古今和歌集卷第四

秋哥上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣

○秋あききぬとめにはさやかあきかにみえねども風のをとにぞおどろかれぬる

秋立日、うへのをのこども、かものかはらに、かはせ

うえうしけるともにまかりてよめる

つ ら ゆ き

河風の涼しくもあるか打うよする浪とよもにや秋はたつらん

題しらず

よみ人しらず

我せこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋のはつ風

昨日こそ早苗とりしかいつのまにいなはそよぎて秋風の吹

秋風の吹にし日より久かたのあまの河原にたよぬ日はなし

久かたの天河原のわたしもり君渡なばかぢかくしてよ

漢川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ  
こひく／＼逢夜は今よひ天川霧立わたりあけずもあらなむ

寛平御時、なぬかの夜、うへにさふらふをのことも哥

たてまつれ、とおほせられける時に、人にかはりてよ

める

と も の り

天河浅せ白浪たどりつゝ渡はてねばあけぞしにける

おなじ御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかぜ

契けむ心ぞつらき七夕の年に一たびあふはあふかは

なぬかのよゝめる

み つ ね

年ごとにあふとはすれど七夕のぬる夜のかずぞすくなかりける

織女にかしつる絲のうちはへて年のをながく戀やわたらむ

題しらす

素 性

今よひこむ人にはあはじ織女のひさしき程にまちもこそすれ

七日の夜の曉によめる

源 宗 于 朝 臣

今はとてわかるゝ時は天河わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

やうかの日よめる

みぶのたゞみね

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみまちわたるべき

題しらず

よみ人しらず

木のまよりもりくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり  
 おほかたの秋くるからに我身こそ衰しき物とおもひしりぬれ  
 我ためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけば先ぞかなしき  
 物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひ行をかぎりと思へば  
 獨ぬる床は草葉にあらねども秋寐くるよひはつゆけかりけり

是貞のみこの家の哥合のうた 是貞 仁和第三  
元右中將

いつはとは時はわかかねど秋の夜ぞ物おもふ事のかぎりなりける

かむなりのつぼに、人々あつまりて、秋の夜おしむう

たよみけるついでによめる

み つ ね

かくばかりおしと思よを徒にねてあかすらむ人さへぞうき

題しらず

よみ人しらず

白雲にはね打かはしとぶかりの數さへ見ゆる秋のよの月

さよ中と夜はふけぬらし鴈がねのきこゆる空に月わたるみゆ

これさだのみこの家の哥合によめる

大江千里

月みればち々に物こそ悲けれ我身ひとつの秋にはあらねど

たゞみね

久かたの月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらん

月をよめる

在原元方

秋のよの月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人のもとにまかれりける夜、きりぐすのなきけるを

きゝてよめる

藤原忠房

垂いたくなゝきそ秋のよのながき思ひは我ぞまされる

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらず鳴虫はわがごと物やかなしかるらむ

## 題しらす

よみ人しらす

秋はぎも色づきぬれば、蜚我ねぬごとやよるはかなしき

秋の野は露こそことにさむからし草むらごと虫のわぶれば

君忍草にやつるゝ故郷は松虫のねぞかなしかりける

秋のゝに道もまどひぬ松むしのごゑするかたに宿やからまし

あきのゝに人松虫の聲すなり我かとゆきていざとぶらはん

紅葉ばのちりてつもれる我やどにたれを松虫こゝらなくらむ

日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬとおもへば山の陰にぞ有ける

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる

在原元方

まつ人にあらぬ物からはつかりのけさなくこゑのめづらしき哉

これさだのみこの家の哥合のうた

ともものり

秋風にはつかりがねぞきこゆなるたが玉づさをかけてきつらん

## 題しらす

よみ人しらす



物のよれは

我門がらにいなおほせどりのなくなべにけさ吹風に鴈かりはきにけり  
いとばやも鳴ぬる鴈かりか白露しらゆきの色いろとる木々きぎももみぢあへなくに  
春霞はるがきかすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋あきぎりの上に  
夜よを寒さむみ衣ころもかりがねねなくなべに萩はぎのしたばもうつろひにけり  
この哥うたは、ある人のいはく、柿本かきもとの人ひとまろがなりと

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

藤原菅根朝臣

秋風あきかぜに聲こゑをほにあげてくる舟ふねはあまのと渡わたかりにぞ有あける

かりのなきけるをきよてよある

み つ ね

うき事ことを思おもつらねて鴈かり金のなきこそわたれ秋あきのよなく

是貞これさだのみこの家の哥合のうた

た ゝ み ね

山里やまのはいれまこそことにわびしけれ鹿かのなくねにめをさましつゝ

よ み 人 し ら ず

○おく山に紅葉ふみわけなくしかのこゑきく時ぞ秋はかなしき

題しらず

秋萩にうらびれをれば葦引の山したどよみ鹿のなくらむ

あき萩をしがらみふせてなくしかのめにはみえずてをとのさやけさ

これさだのみこの家の哥合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋はぎの花さきにけり高砂のおのへの鹿は今や鳴らむ

むかしあひしりて侍ける人の、秋のうにあひて、物が

たりしけるついでによめる

み つ ね

あき萩のふるえにさける花みればもとの心は忘ざりけり

題しらず

秋はぎのしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

なきわたるかりの涙やおちつらむ物思やどのはぎの上の露

はぎのつゆ玉にぬかむととればけぬよしみむ人は枝ながら見よ

ある人のいはく、この哥はならのみかどの御哥也と

おりて見ばおちぞしぬべき秋はぎの枝もとをうにをけるしらつゆ

萩が花ちるらむをのうつゆじもにぬれてをゆかむさよはふぐとも

是貞のみこの家の哥合によめる

文室あさやす

秋のゝにをく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ

題しらず

僧 正 遍 昭

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな

僧正へんせうがもとに、ならへまかりける時に、おと

こ山にて女郎花を見てよめる

こ山にて女郎花を見てよめる

をみなへしうしと見つゝぞ行すぐるおとこ山にしたてりとおもへば

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋のゝにやどりはすべし女郎花なをむつまじみたびならなくに

題しらず

をのゝよし木

女郎花おほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をもちたちなん

朱雀院のをみなへしあはせに、よみてたてまつりける左のおほいまうちぎみ本院

をみなへし秋の野風に打なびき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣

秋ならであふ事かたき女郎花あまのかはらにおいぬ物ゆへ

たが姝にあらぬ物ゆへをみなへしなぞ色にいでもまだきうつろふ

み っ ね

つまこふる鹿ぞ鳴なる女郎花をのがすむのゝ花としらざるや

た じ み ね

人の見る事やくるしき女郎花秋ぎりにのみたぢかくるらん

獨のみながむるよりはをみなへし我すむやどにうへてみましを

ものへまかりけるに、人の家に、女郎花うへたりけるを

みてよめる

兼 覽 玉

女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれば

寛平御時、藏人所のをのことも、さかのに、はな見む

とてまかりたりける時、かへるとて、みならたよみけ

るついでによめる

平さだぶん

花にあかでなにかへるらむ女郎花おほかるのべにねなまし物を

これさだのみこの家の哥合によめる  
としゆきの朝臣

なに人がきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとくのべをにははす

ふぢばかまをよみて、人につかはしける  
つらゆき

やどりせし人のかたみか藤ばかまわすられがたきかにはほひつゝ

蘭をよめる  
そせ

主しらぬかこそにほへれ秋のゝにたがぬぎかけしふぢばかまぞ

題しらず  
平定文

今よりはうへてだに見じ花すゝきほにいづる秋はかなしかりけり

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた  
在原むねやな

秋のゝの草のたもとか花薄ほにいでゝ招袖とみゆらん

素性法師

我のみやあはれと思はんかた蜚なくゆふかげの山となでしこ

## 題しらす

よみ人しらす

秋あきなるひとつ草とぞ春はみし秋は色々の花にぞ有ける

百くさの花のひもとく秋のゝに思たはれむ人などがめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてのゝちはうつろひぬとも

仁和のみかど、みこにおはしましける時、ふるのたき

御覽せんとておはしましけるみちに、遍昭がはゝの家

にやどりたまへる時に、庭を秋の野につくりて、おほ

むものがたりのついでに、よみてたてまつりける

僧 正 遍 昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋ののらなる



古今和歌集卷第五

秋哥下

これさだのみこの家の哥合のうた

文室やすひで

吹からに焮の草木のしほるればむべ山風を嵐といふらん

草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける

秋の哥合しける時によめる

紀よしも ち観望

紅葉せぬときはの山は吹風のをとにや焮をきゝ渡らん

題しらす

よみ人しらす

霧たちて鴈ぞ鳴なるかたをか朝の原は紅葉しぬらん

神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびの杜

千はやぶる神なび山のもみちばに思はかけじうつろふものを

貞観御時、綾綺殿のまへに梅の木ありけり、西の方に



させりける枝の、もみぢはじめたりけるを、うへにさ

ぶらふをのこども、よみけるついでによめる

藤 原 勝 臣

おなじえをわきて木のはのうつろふは西こそ秋の始なりけれ

いし山にまうでける時、をと山紅葉をみてよめる つ ら ゆ き

秋風の吹にし日よりをと山峯のこずゑも色付にけり

これさだのみこの家の哥合によめる としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをち々にそむらん

壬 生 忠 峯

秋のよの露をばつゆとをきながらかりの涙やのべをそむらん

題しらず よみ人しらず

秋の露色くことにをけばこそ山の木のはのちぐさなるらめ

もる山のほとりにてよめる つ ら ゆ き

白露も時雨もいたくもる山はしたばのこらず色付にけり

秋のうたとてよめる 在 原 元 方

雨ふれどつゆももらじをかさとりの山はいかでもみぢそめけむ

神のやしろのあたりをまかりける時に、いがきのうち

のもみぢを見てよめる

つらゆき

千はやぶる神のいがきにはふくすも秋にはあへずうつろひにけり

これさだのみこの家の哥合によめる

たよみね

雨ふれば笠とり山のもみちばゝ行かふ人の袖さへぞてる

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらず

ちらねどもかねてぞおしきもみちばゝ今は限の色とみつれば

やまとのくにゝまかりける時、さほ山に、きりのたて

りけるをみてよめる

紀のともものり

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山べを立かくすらむ

これさだのみこの家の哥合のうた

よみ人しらず

秋霧はけさはなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん

秋の哥とてよめる

坂上これのり

さほ山のはゝその色はうすけれど秋は深くも成にけるかな

人のせんざいに、きくにむすびつけてうへける 在原なりひらの朝臣

うつしうへば秋なき時やさかさらむ花こそちらめねさへかれめや

寛平御時、きくの花をよませ給ける としゆきの朝臣

久かたの雲のうへにてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

このうたは、まだ殿上ゆるされざりける時に、めしあげられてつか

うまつれるとなむ

これさだのみこの家の哥合の哥 きのとも のり

露ながらおりてかざゝむ菊花おいせぬ秋のひさしかるべく

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた 大 江 千 里

裁し時花まちどをにありしきくうつろふ秋にあはむとや見し

おなじ御時せられける菊あはせに、すはまをつくりて、

きくの花うへたりけるに、くはへたりけるうた、ふき

あげのはまのかたに、きくうへたりけるによめる

すがはらの朝臣 延喜元年以後  
贈位以前也  
内注朝臣

秋風の吹あげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

仙宮に、菊をわけて人のいたれるかたをよめる 素性法師

ぬれてほす山路のきくの露のまにいつかちとせを我はへにけん

菊の花のもとにて、人の人まてるかたをよめる とものり

花みつゝ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

おほさはの池のかたに、きくうへたるをよめる

一もとゝ思し菊をおほさはの池の底にもたれかうへけん

世中のはかなき事を思けるおりに、きくの花をみてよ

める つらゆき

秋の菊にほふ限はかざしてん花よりさきとしらぬ我身を

しらぎくの花をよめる 凡河内躬恒

心あてにおらばやおらんはつしものをきまどはせる白菊の花

これさだのみこの家の哥合のうた よみ人しらす

色かはる秋の菊をばひとゝせにふたゝびにほふ花とこそみれ

仁和寺に菊花めしける時に、哥そへてたてまつれ、と

おほせられければ、よみてたてまつりける 平さだぶん

秋をよきて時こそ有けれ菊花うつろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を、うつしうへたりけるをよめ

る つらゆき

さきそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらず よみ人しらず

さほ山のは、その紅葉ちりぬべみよるさへ見よとてらす月影

宮づかへひさしうつかうまつらで、山ざとにこもり侍

けるによめる 藤原關雄治部少輔五位

おく山のいはがき紅葉ちりぬべしてゐる日の光みる時なくて

題しらず よみ人しらず

龍田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなむ

この哥は、ある人、ならのみかどの御哥也となむ申

たつ田河もみちばながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又は、あすかどほもみちばながる

此哥不注人丸哥<sub>同</sub>

こひしくばみてもしのぼむ紅葉ばを吹なちらしそ山おろしの風  
 秋風にあへずちりぬるもみちばのゆくゑさだめぬ我ぞかなしき  
 あきはきぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし  
 ふみわけて更にやとはんもみちばのふりかくしてし道と見ながら  
 殊の月山邊さやかにてらせるはおつる紅葉のかずをみよとか  
 吹風の色のちくさに見えつるは秋の木のはのちればなりけり

せ き を

霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のをればかつちる

うりむるんの木のかげに、たゞすみてよみける 僧正へむせう

侘人のわきてたちよる木のもとはたのむ陰なく紅葉ちりけり

二条の後の、春宮のみやす所と申ける時に、御屏風に、

たつた河にもみぢながれたるかたをかけりけるを題に

てよめる

もみちばの流てとまるみなとには紅深き浪や立らむ

そせい

千はやぶる神世もきかず龍田川から紅に水くゞるとは

これさだのみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

我きつるかたもしられずくらぶ山木々の木のはのちるとまがふに

たじみね

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

北山に紅葉おしむとて、まかれりける時によめる

つらゆき

みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるの錦なりけり

秋のうた

かねみの王

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木のはのぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍ける時、紅葉を見てよめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする

神なび山をすぎて、龍田川をわたりける時に、紅葉の

流けるをみてよめる

きよはらのふかやぶ

神なびの山をすぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

ふぢはらのおきかせ

白浪に秋の木のはのうかべるをあまのながせる舟かとぞみる

たつた川のほとりにてよめる

坂上これのり

紅葉ばの流ざりせば龍田河水の殊をば誰かしらまし

しがの山ごえにてよめる

はるみちのつちき

山河に風のかけたるしがらみは流もあへぬもみぢなりけり

池のほとりにて、紅葉のちるをよめる

み

風ふけばおつる紅葉ば水きよみちらぬ影さへ底に見えつゝ

亭子院の御屏風のゑに、河わたらんとする人の、もみ

ぢのちる木のもとに、むまをひかへてたてるをよませ

給ければ、つかうまつりける



立とまりみてをわたらんもみちばゝ雨とふるとも水はまさらじ

これさだのみこの家の哥合のうた

たゞみね

山田もる秋のかりいほにをくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり

題しらす

よみ人しらす

ほにもいでぬ山田をもると藤衣いなばの露にぬれぬ日はなし

かれる田におふるひづちのほにいでぬは世を今更に秋はてぬとか

北山に、僧正へんせうとたけがりしにまかれりけるに

よめる

そせい法師

紅葉ばゝ袖にこきいれてもていでん秋は限とみむ人のため

寛平御時、ふるき哥たてまつれ、とおほせられければ、

龍田川もみちばながるといふ哥をかきて、そのおなじ

心をよめりける

おきかせ

み山よりおちくる水の色みてぞ秋は限とおもひしりぬる

秋のはつる心を、たつた河におもひやりてよめる つらゆき

年ごとにもみちばながす龍田川みなとや秋の泊なるらん

九月なが月のつごもりの日・大井にてよめる

ゆふづく夜をぐらの山に鳴鹿のこゑのうちにや秋はくるらん

おなじつごもりの日よめる

み つ

ね

道しらは尋もゆかむもみちばをぬさとたむけて秋はいにけり



古今和歌集卷第六

冬 哥

題しらず

讀人しらず

龍田<sup>山</sup>河錦をりかく神無月時雨の雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

題しらず

よみ人しらず

おほぞらの月のひかりしきよければ影みし水ぞまつ氷ける  
夕されば衣手さむしみよしのよしの山にみ雪ふるらし  
今よりはつぎてふらなん我宿のすゝきをしなみふれる白雪  
ふる雪はかつぞけぬらし葦引の山のたぎつせをとまさるなり  
この川にもみち葉ながるおく山の雪けの水ぞいままさるらし

古郷はよし野の山しちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし  
我宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

冬の哥とてよめる

紀 貫 之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける

しがの山ごえにてよめる

紀 あ き み ね

白雪の所もわかずふりしけば岩ほにもさく花とこそみれ

ならの京にまかれりける時に、やどれりける所にてよ

める

さかのうへのこれのり

みよし野の山の白雪つもるらし故郷さむくなりまざるなり

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞみる

壬 生 忠 峯

みよしの、山の白雪ふみわけて入にし人のをとづれもせぬ

白雪のふりてつもれる山巔はすむ人さへや思きゆらむ

雪のふれるをみてよめる

凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思きゆらん

ゆきのふりけるをよみける

きよはらのふかやぶ

冬ながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

雪の、木にふりかゝれりけるをよめる

つらゆき

冬ごもり思かけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

やまとのくにまかれりける時に、雪のふりけるをみ

てよめる

坂上これのり

あさぼらけ在明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪

題しらず

よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見ぬ

梅花それとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふれよば

この哥、ある人のいはく、柿本の人丸が哥なり

むめの花に、雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく

雪のうちの梅花をよめる

きのつらゆき

梅のかのふりをける雪にまがひせば誰かことくわきておらまし

ゆきのふりけるをみてよめる

紀ともものり

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきておらまし

物へまかりける人をまちて、しはすのつごもりによめ

る  
み  
つ  
ね

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はをとづれもせず

年のはてによめる

在原元方

荒玉のとしのをはりになるごとに雪も我身もふりまさりつゝ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつるにもみぢぬ松もみえけれ

年のはてによめる

はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか川流てはやき月日なりけり

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつ

れる

きのつらゆき

行としのおしくもあるかなます鏡みる影さへにくれぬと思へば





古今和歌集卷第七

賀 哥

題しらず

笑稱 新

よみ 人しらず

我君はちよにやちよにさどれいしの巖と成て苔のむすまで  
 渡津海の濱のまきごをかぞへつゝ君が千とせのありかずにせむ  
 しほの山さしでのいそにすむ千鳥君がみよをばやちよとぞなく  
 我よはひ君がやちよに取そへたとめをきては思いでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に、七十の賀たまひける時の御う

天皇と御明との  
御申か衆た

かくしつゝともかくにもながらへて君がやちよにあふよしもがな  
 仁和のみかどの、みこにおはしましける時に、御をば  
 のやそちの賀に、しろがねをつゑにつくりけるを見て、

かの御をばにかはりてよみける

僧正へんぜう

ちはやぶる神やきりけむつくからにちとせの坂もこえぬべらなり

ほりかはのおほいまうちぎみの四十の賀、九条の家に

てしける時よめる 昭宣公貞観十四年右大臣左大将

在原業平朝臣十七年四十

櫻花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

さだときのみこの、をばのよそちの賀を、大井にてし

ける日よめる

きのこれをか 家本用之ノリニ  
或説ニ惟熊

龜のおの山のいはねをとめておつる瀧の白玉千世のかずかも

さだやすのみこの、きさいの宮の五十賀たてまつりけ

る御屏風に、櫻の花のちるしたに、人の花みたるかた

かけるをよめる

藤原おきかせ

いたづらにすぐる月日はおもほえで花みてくらす春ぞすくなき

もとやすのみこの七十の賀の、うしろの屏風によみて

かきける

きのつらゆき

本康一品式部卿延喜元號号八條宮 母從四位上紀押子

貞保一品式部卿清和第三号南宮母三条后延長三年號

春くれば宿に先さく梅花君がちとせのかざしとぞみる

そせい法師

いにしへにありきあらずはしらねどもちとせのためし君にはじめむ  
ふしておもひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらむ我君のため

藤原三善が、六十の賀によみける

在原しげはる

鶴龜も千とせのゝちはしげなくにあかぬ心にまかせはてゝん

この哥は、ある人、在原のときはるがともいふ

よしみねのつねなりが、よそぢの賀に、むすめにかは

りてよみ侍ける

そせい法師

萬世を松にぞ君をいはひつるちとせのかげにすまむと思へば

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十賀しける時に、

四季のゑかけるうしろの屏風に、かきつけたりけるう

た

かすがのにわかになつみつゝ萬世をいはふ心は神ぞしるらん

御母

藤原朝臣の四十賀しける時に、  
定國大納言右大將延喜八年七月日藤四十

現在在原の助動符

山高みくもいみに見ゆる櫻花心の行ておらぬ日ぞなき

夏

めづらしきこゑならなくに時鳥こゝらの年をあかずもあるかな

秋

住の江の松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつ白なみ

千鳥なくさほちの河ぎり立ぬらし山のこのはも色まさりゆく

秋くれど色もかはらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしの山した風にはなぞちりける

文徳太子保明親王延喜三年誕生四年二月十日立太子十六年四月元服  
春宮のむまれたまへりける時にままいりてよめる 典侍藤原よるか朝臣

峯高き春日の山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり

廿三年三月廿一

## 古今和歌集卷第八

## 離別哥

題しらす

因幡國

在原行平朝臣

立わかれいなばの山の峯におふる松としきかば今歸りこむ

よみ人しらす

すがるなく秋のはぎ原あさたちて旅行人をいつとかまたむ  
 限なき雲ゐのよそにわかるとも人を心にをくらざむやは

をのよちふるが、みちのくのすけにまかりける時に、

はよのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとどめそ

さだときのみこの家にて、藤原きよふが、あふみのす

けにまかりける時に、むまのはなむけしけるよめるきのとしさだ

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人に、よみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞立別なばこひしかるべし

人のむまのはなむけにてよめる

きのつらゆき

おしむからこひしきものを白雲のたちなむのちはなに心ちせん

ともだちの、人のくにへまかりけるによめる

在原しげはる

別てはほどをへだつとおもへばやかつ見ながらにかねてこひしき

あづまの方へまかりける人に、よみてつかはしける

いかこのあつゆき

おもへども身をしわかかねばめにみえぬ心を君にたくへてぞやる

あふさかにて、人をわかれける時よめる

なにはのよろづを万難

相坂の關しまさしき物ならばあかずわかるゝ君をとよめよ

枕 題しらす

よみ人しらす

唐衣たつ日はきかじあさつゆのをきてしゆけばけぬべき物を

この哥は ある人、つかさをたまはりて、あたらしきめにつきて、年へて

すみける人をすてゝ、たゞあすななつ、と許いへりける時に、ともかう

もいはで、よみてつかはしける

ひたちへまかりける時に、藤原のきみとしに、よみて

つかはしける

寵 或本無此名

あさなけにみべきゝみとしたのまねば思立ぬる草枕なり

きのむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家に

やどりて、あかつきいでたつとて、まかり申ければ、

女のよみていだせりける

よみ人しらず

えぞしらぬ今心見よいのちあらば我やわするゝ人やはぬと

あひしりて侍ける人の、あづまのかたへまかりけるを、

をくるとてよめる

ふかやぶ

雲るにもかよふ心のをくれねばわかると人に見ゆばかりなり

ともの、あづまへまかりける時によめる

よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくだく旅かな



みちのくにへまかりける人に、よみてつかはしける せつち つらゆき  
 しら雲のやへにかさなるをちにてもおもはむ人に心へだつな  
 人をわかれける時によみける

別てふ事は色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ 木ヲ

あひし川りける人の、こしのくにまかりて、年へて

京にまうできて、又かへりける時によめる 凡河内みつね

かへる山ないにそはありてあるかいひもきてもとまらぬ名にこそ有けれ

こしのくにへまかりける人に、よみてつかはしける

よそにのみ戀やわたらむしら山の雪見るべくもあらぬ我身か

をとほの山のほとりにて、人をわかるとてよめる つらゆき

をとほ山たこだかくなきて時鳥君が別をおしむべらなり

藤原のちかかげが、からものつかひに、なが月のつ

ごもりがたにまかりけるに、うへのをのこども、さけ

たらびけるついでによめる

藤原兼茂 延喜元 年 參 障

もろともに鳴てとゞめよ **葦**秋の別はおしくやはあらぬ

平もとのり元相藏人右門尉

秋ぎりのともに立いで、別なばはれぬ思ひにこひや渡らん

源のさねが、つくしへゆあみむとてまかりける時、山

ざきにて、わかれおしみける所にてよめる

し ろ め

命だに心になふ物ならば何か別のかなしからまし

山ざきより、神なびの森まで、をくりに入々まかりて、

かへりがてにして、別おしみけるによめる

源 さ ね右近少将買

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざ歸なむ

今はこれよりかへりね、とさねがいひけるおりによみ

ける

藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず

藤原のこれをかゞ、むさしのすけにまかりける時、を

くりにあふさかをこゆとてよみける

つ ら ゆ き

かつこえて別もゆくか相坂は人だのめなる名にこそありけれ

おほえのちふるが、こしへまかりけるむまのはなむけ

によめる

藤原かねすけの朝臣

君が行こしの白山しらねども雪のまにく跡はたづねむ

人の花山にまうできて、ゆふさりつかた歸りなむとし

ける時によめる

僧正へんぜう

夕暮のまがきは山と見えなくむよるはこえじとやどりとるべく

山にのぼりてかへりまうできて、人々別けるついでに

よめる

幽仙法師

別をば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまにく

うりむみんのみこの、舍利會に、山にのぼりてかへり

けるに、櫻の花のもとにてよめる

僧正へんぜう

山風に櫻吹まきみだれなむ花のまぎれにたちとまるべく

幽仙法師

ことならば君とまるべくにははなんかへすは花のうきにやはあらぬ

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、ふるのた

き御覽じにおはしまして、かへりたまひけるによめる 兼 藝 法 師

あかずしてわかるゝ涙瀧にそふ水まさるとやしもはみるらん

かむなりのつぼにめしたりける日、おほみきなどたう

べて、雨のいたくふりければ、ゆふさりまで侍て、ま

かりいでけるおりに、さかづきをとりて つ ら ゆ き

秋はぎの花をば雨にぬらせども君をばましておしとこそおもへ

とよめりける返し 兼 覽 王

おしむらむ人の心をしらぬまに焮の時雨と身ぞふりにける

かねみのおほきみに、はじめて物がたりしてわかれけ

る時によめる み つ ね

わかるれどうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきになにをこひま

題しらず よみ人しらず

持扇  
語

あかずしてわかるゝ袖の白玉を君がかたみとつゝみてぞゆく

玉  
扇

限なくおもふ涙にそぼちぬる袖はかはかじあはむ日までに

かきくらしことはふらなん春雨にぬれぎぬきせて君をとどめん

しゐて行人をとどめむ櫻花いづれを道とまどふまでちれ

しがの山ごえにて、いし井のもとにて、ものいひける

つらゆき

結手の滴にゝごる山の井のあかでも人に別ぬるかな

みちにあへりける人のくるまに、物をいひつきて、わ

かれける所にてよめる

とも のり

したのおびの道はかたぐゝわかるとも行廻てもあはむとぞおもふ

古今和歌集卷第九

器旅歌

もろこしにて、  
美上(又)平

月をみてよみける

安 倍 仲 鷹

あまの原大空ふりさけ

みればかすがなるみかさの山にいでし月かも

このうたは、むかし、なかもろを、もろこしに物ならはしにつかはしたりけるに、あまたの年をへて、えかへりまうでこざりけるを、このくにより、又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、いでたちけるに、めいしうといふ所のうみべにて、かのくにの人、むまのはなむけしけり、よるになりて、月の、いとおもしろくさしいでたりけるをみてよめる、となむかたりつたふる

おきのくに、ながされける時に、船にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わだの原海やそしまかけて漕いでぬと人にはつげよあまのつり舟

題しらす

よみ人しらす

宮こいでふけふみかのはら泉川かは風さむし衣かせやま

ほのぐとあかしの浦のあざ霧に嶋がくれ行舟をしぞおもふ

この哥は、ある人のいはく、柿本人麿が哥也

あづまの方へ、友とする人、ひとりふたりいざなひて

いきけり、みかはのくにやつはしといふ所にいたれり

けるに、その河のほとりに、かきつばたいとおもしろ

くさけりけるを見て、木かげにおりゐて、かきつばた

といふいつもじを、くのかしらにすへて、たびの心を

よまむとてよめる

在原業平朝臣

から衣きつなれにしつましあればはるぐきぬるたびをしぞ思

むさしのくにと、しもつふさのくにとの中にある、す

みだ川のほとりにいたりて、宮この、いとこひしうお

心は三つ物  
下別九字  
そのけり

又たのきのつり舟

よみ人しらす

よみ人しらす

ほえければ、しばし河のほとりにおりゐて思やれば、

かぎりなくとをくもきにけるかな、とおもひわびてな

がめをるに、わたしもあり、はや舟にのれ、日くれぬ、

といひければ、舟にのりてわたらむとするに、みな人

ものわびしくて、京に思人なくしもあらず、さるおり

に、しろき鳥の、はしとあしとあかきが、河のほとり

にあそびけり、京にはみえぬとりなりければ、みな人

見しらず、わたしもありに、これはなにとりぞ、とゝひ

ければ、これなむみやこどり、といひけるをきゝてよ

める

〇名にしおはどいざことゝはむ宮こどり我おもふ人は有やなしやと

題しらす

よみ人しらす

北へ行鴈ぞなくなるつれてこしかずはたらずぞかへるべらなる

この哥は、ある人、おとこ女もるともに、人のくにへまかきけり、おとこ



まかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり京へかへりけるみ

ちに、かへるかりの、なきけるをきよてよめる、となむいふ

あづまの方より、京へまうでくとてみちにてよめる

お

と玉生よしなりが女

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらん

こしのくにへまかりける時、しら山をみてよめる

み

つ

ね

きえはつる時しなければこしぢなるしら山のなは雪にぞ有ける

あづまへまかりける時、みちにてよめる

つ

ら

ゆ

き

いによる物ならなくに別ぢの心ほそくもおもほゆるかな

かひのくにへまかりける時、みちにてよめる

み

つ

ね

よを寒みをくはつしもをはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

たちまのくにのゆへまかりける時に、ふたみのうらと

いふ所にとまりて、ゆふさりのかれいひたうべけるに、

ともにあるける人々の、うたよみけるついでによめる

ふぢ

はらのかねすけ

ゆふづくよおほつかなきを玉匣ふたみの浦はあけてこそみめ

これたかのみこのともに、かりにまかりける時に、あ

まの河といふ所の、かはのほとりにおりゐて、さけな

どのみけるついでに、みこのいひけらく、かりして、

あまのかはらにいたる、といふ心をよみて、さかづき

はさせ、といひければよめる

在原業平朝臣

かり狩くらししたなばたつめに宿からむ天の河原に我はきにけり

みこ、此うたを、返々よみつゝ、返しえせずなりにけ

れば、ともに侍てよめる

きのありつね

ひとゝせにひとたびきます君までばやどかす人もあらじとぞ思

朱雀院の、ならにおはしましける時に、たむけ山にて

よみける

すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

素性法師

たむけには袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむつとりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

籠まふか。均



# 古今和歌集卷第十

## 物名

うぐひす

藤原としゆきの朝臣

心から花のしづくにそぼちつゝうぐひすとのみ鳥のなくらむ

ほととぎす

くべきほどときすぎぬれやまちわびて鳴なるこゑの人をとよむる

在原しげはる

浪のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはと袖にはかなからんや

壬 生 忠 峯

たもとにははなれて玉をつゝまめやこれなんそれとらつせみんかし

うめ

よみ人しらす

あなうめにつねなるべくもみえぬ哉こひしかるべきかは匂つゝ

春わかかにはさくら 中では様 づらゆき  
かつげども浪のなかにはさぐられて風吹ごとなにうきしつむ玉

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすもゝのはながめて思べらなり

からもゝの花

ふかやぶ

あふからもゝのはなをこそかなしけれわかれむ事をおねて思へば

たちばな

をのゝしげはる

葦引の山たちはなれゆく雲のやどりさだめぬ世にこそ有けれ

をがたまの木

ともり

みよしのゝよしのゝたきにうかびいづるあはをかたまのきゆとみつらむ

やまがきの木

よみ人しらす

秋はきぬ今やまがきの蜚よなくなかむ風のさむさに

あふひかつら

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしとおもはざるべき

人めゆへのちにあふ日のはるあだなる物といにやおもひなされん

くたに

僧正へんせう

ちりぬればのちはあくたになる花を思しらずも迷てふ哉

さうび

つらゆき

我はけさうびにぞみつる花の色をあだなる物といふべかりけり

をみなへし

とものか

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にもほにも絲をみなへし

朝露をわけそぼちつゝ花みむと今ぞの山をみなへしりぬる

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふ

いつもじを、くのかしらにをきてよめる

つらゆき

をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

きちかうのはな

とものみり

あきちかうのはなりにけり白露のをける草ばも色かはりゆく

しをに

よみ人しらず

ふりはべていざ舊里の花みむとこしを匂ぞうつろひにける

りうだむのはな

とも のり

我やどのはなふみちらすととりうたむのはなればやくこにしもくる

おばな

よみ人しらず

ありと見てたのむぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてん

けにこし

やたべの名實矢田部

うちつけにこしとや花の色をみむをく白露のそむるばかりを

二条の后、春宮のみやすん所と申ける時に、めどにけ

づり花させりけるをよませたまひける

文室やすひで

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこの身なる時もかな

しのぶぐさ

きのとしさだ

山たかみつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞぢりける

やまし

平あつゆき

郭公峯の雲にやまじりにしありとはきけどみるよしもなき

がらはぎ

よみ人しらず

空蟬のからは木ごとにとゞむれど玉の行をを見ぬぞかなしき

かはなぐさ

ふかやぶ

うば玉の夢になにかはなぐさまむうつゝにだにもあかぬ心を

さがりこけ

たかむこのとしはる高向

花の色はたゞひとさかりこけれども返々ぞつゆはそめける

にがたけ

しげはる

いのちとて露をたのむにかたければ物わびしらになくのべのむし

かはたけ

かげのりのおほきみ

さ夜ふけてなかばたけゆく久かたの月吹かへせ秋の山かせ

わらび

しんせい法し

煙たちもゆともみえぬ草のはを誰かわらびとなづけそめけん

さゝまつびははせをば

きのめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ



なしなつめくるみ

兵衛たふがもとに侍ける

あぢきなしなげきなつめなつめそりき事にあひくるみをばすてぬ物から

からことふ所にて、春のたちける日よめる

安倍清行朝臣

浪のをとのけさからことにきこゆるは春のしらべやあらたまるらん

いかゞさき

兼 覽 王

かぢにあたる浪のしづくを春なればいかゞさきちる花とみざらん

からさき

あほのつねみ阿保親覽

かの方にいつからさきに渡けん浪ぢはあともものこらざりけり

伊 勢

浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらん

かみやがは

つ ら ゆ き

うば玉の我くろかみやかはるらん鏡の影にふれる白雪

よどかは

葦引の山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

かたの

たゞみね

夏草のうへはしげれるぬま水の行方のなき我心かな

かつらのみや

源ほどこす也

秋くれれば月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを

百和香

よみ人しらす

花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思

すみながし

しげはる

春がすみながしかよひぢなかりせば秋くるかりはかへらざらまし

をき火

みやこのよしか都曇

洗いづるかたよにみえぬ涙川おきひむ時やそこはしられん

ちまき

大江千里

のちまきのをくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく

はをはじめのをはてにて、ながめをかけて、時のうた

よめ、と人のいひければよみける

僧正聖實

花のななかかめめにああくくややととててわわけけゆゆけけばばここゝゝろろぞぞととももににちちりりぬぬべべららなる

古今和歌集卷第十一

戀哥一

題しらす

讀人しらす

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもする哉

素性法師

をとにのみきくの白露よるはおきてひるはおもひにあへずけぬべし

紀貫之

吉野川いは浪たかく行水のはやくぞ人を思そめてし

藤原勝臣

白浪の跡なき方に行舟も風ぞたよりのしるべなりける

在原元方

をとほ山をとにきつと相坂の關のこなたに年をふる哉

立歸りあはれとぞ思よそにても人ひとに心をおきつしら波

つらゆき

世中はかくこそ有けれ吹風のめにみぬ人もこひしかりけり

右近のむまばのひをりの日、むかひにたてたりけるく

るまのしたすだれより、女のかほの、ほのかに見えけ

れば、よみてつかはしける

在原業平朝臣

みずもあらずみもせぬ人のこひしくばあやなくけふやながめくらさん

返しかへしよみ人しらす

しるししるしらぬなにかあやなくわきていはむおもひのみこそしるべなりけれ

かすがのまつりにまかれりける時に、物見にいでたり

ける女のもとに、家を尋てつかはせりける  
みぶのたどみね

春日野の雪まをわけておひいでくる草くさのはつかにみえし君はも

人の、花つみしける所にまかりて、そこなりけるひと

のもとに、のちによみてつかはしける  
つらゆき

山櫻霞のまよりほのかにもみてし人こそこびしかりけれ  
歌身もつて

題しらず

山櫻霞のまよりほのかにもみてし人こそこびしかりけれ

たよりにもあらぬおもひのあやしきけんを人につくるなりけり

定例

と か た

凡河内みつね

はつかりのはつかにこゑをきよしよりなかぞらにのみ物を思哉

つ ら ゆ き

あふ事はくもるはるかになる神のをとにきよつゝ戀渡かな

よみ人しらず

かたいとをこなたかなたによりかけてあはずば何を玉のをにせん

夕暮は雲のはたてに物ぞ思あまつそらなる人をこふとて

かりごもの思みだれて我こふといもしるらめや人しつげずば

つれもなき人をやねたくしらすゆのおくとはなげきぬとはしのぼん

ちはやぶるかもの社のゆふだすきひと目も君をかけぬ日はなし

我こひはむなしき空にみちぬらし思やれども行方もなし

又下りたり

するがなるたごの浦浪たゝぬ日はあれども君をこひぬ日ぞなき  
 ゆふつく夜さすやをかべの松のはのいつともわかぬこひもする哉  
 足引の山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる  
 吉野川いはきりとおし行水のをとにはたてじこひはしぬとも  
 たぎつせの中にもよどはありてふをなど我戀のふちせともなき  
 山たかみしたゆく水のしたにのみ流てこひむこひはしぬとも  
 おもひいづるときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しき物を  
 人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ  
 秋の野のおばなにまじりさく花の色にやこひむあふよしをなみ  
 我そのゝむめのほつえに鶯のねになきぬべきこひもする哉  
 葦引の山時鳥わがことや君にこひつゝいねがてにする  
 夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまで我身したもえをせん  
 戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずも成にけらしも  
 あはれてふ事だになくばなにをかは戀のみだれのつがねをにせん

思ふには忍る事ぞまけにける色にはいでじとおもひし物を

我戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ

あさぢふのをのしのはら忍とも人しるらめやいふ人なしに

人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしのなき

おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとするしたひも

いで我を人などがめそおほ舟のゆたのたゆたに物思ころぞ

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定かねつる

いせのうみのあまのつりなはうちはへてくるしとのみやおもひ渡らん

涙川何みなかみを尋けむ物思ときの我身なりけり

たねたねあればたねいほにも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめやも

あさなく立河霧のそらにのみうきておもひのある世なりけり

わすらるゝ時しなればあしたづのおもひみだれてねをのみぞなく

唐衣ひもゆふぐれになる時は返々ぞ人はこひしき

よひくくに枕さだめむ方もなしかにねしよか夢に見えけむ



戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける

人の身もならばしもの（命）をあはずしていざ心みむこひやしぬると

しのぶればくるしき物を人しれず思てふ事たれにかたらん

こむ世にもはやなりなむ（木末）め（命）のまへにつれなき人を昔と思はん

つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな

行水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

人を思心は我にあらねばや身（存）のまよふだにしられざるらむ

おもひやるさかひはるかになりやすまるまよふ夢ぢにあふ人のなき

夢の内にあひみむことをたのみつゝ（死）くらせるよひはねむ方もなし

こひしねとするわざならしむば玉（死）のよるはずがら（死）に夢に見えつゝ

涙河枕ながるゝうきねにはゆめもさだかにみえずぞ有ける

戀すれば我身はかけと成にけりさりとて人にそはぬ物ゆへ

かゝり火にあらぬ我身のなぞも（死）かく涙（死）の川にうきてもゆらん

篝火の影となる身のわびしきは流てしたにもゆるなりけり

はやきせにみるめおひせば我袖の涙の河にうへまし物を  
 おきべにもよらぬ玉藻の浪のうへにみだれてのみやこひわたりなん  
 あしがものさはぐ入江の白浪のしらずや人をかくこひんとは  
 人しれぬ思をつねにするかなるふじの山こそ我身なりけれ  
 とぶ鳥のこゑもきこえぬおく山の深き心を人はしらん  
 あふさかのゆふつけどりも我ごとく人やこひしきねのみなくらん  
 相坂の關にながるゝいはし水いはで心におもひこそすれ  
 うき草のうへはしげれる淵なれや深き心をする人のなき  
 打わびてよばゝむこゑに山びこのこたへぬ山はあらじとぞおもふ  
 心がへする物にもかたこひはくるしき物と人にしらせむ  
 よそにしてこふればくるしいれひものおなじ心にいざむすびてん  
 春たてばきゆる氷のゝこりなく君が心は我にとけなん  
 あけたてば蟬のおりはへなきくらしよるは螢のもえこそわたれ  
 夏虫の身をいたづらになすこともひとつおもひによりてなりけり

秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘しもせむ

ゆふさればいととひがたき我袖に焔の露さへをきそはりつゝ  
いつとてもこひしからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘しもせむ

あきの田のほの上をてらすいなづまのひかりのまにも我やわするゝ  
人めもる我かはあやな花すゝきなどかほにいでゝこひずしもあらん

あは雪のたまればがてにくだけつゝ我物おもひのしげき比哉

おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはむこひのしげきに

古今和歌集卷第十二

戀哥二

題しらす

小野小町

おもひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺ざらましを  
うたゝねにこひしき人をみてしよりゆめてふ物はたのみそめてき  
いとせめて戀しき時はむば玉のよるの衣をかへしてぞきる

素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるゝ夜ごとに

しもついてもでらに、人のわざしける日、眞せい法師

の、だうしにていへりけることを、哥によみて、をのゝ

こまちがもとにつかはしける

あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

返し

をろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつせなれば

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

藤原としゆきの朝臣

戀わびてうちぬる中に行かよふ夢のたゞちはうつゝならなん

すみの江の岸による浪よるさへやゆめのかよひ路人めよぐらむ

をのゝよしき

我こひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

紀ともものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまどひまされるこひもするかな

夕されば螢よりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき

篠のはにをく霜よりもひとりぬる我衣てぞさえまさりける

我やどの菊のかきねにをく霜のきえかへりてぞこひしかりける

川の瀬になびく玉美玉のみがくれて人にしられぬ戀もする哉

みぶのたゞみね

こゝま ち

外 經 行  
一 生

かきくらしふる白雪のしたぎえに消て物おもふ比にもあるかな

藤原おきかせ

君こふる涙のがとこにみちぬれば身をつ水く氷し析とぞ我はなりける

しぬる命いきもやすると心見に玉のを連ば舞かりあはむといはなん

侘ぬればしひてわすれんとおもへども夢といふものぞ人だのめなる

よみ人しらず

わりなくもねてもさめてもこひしき心をいづちやらば忘む

戀しきにわびて玉魂しひまどひなばむなしきからのなにやのこらん

魂のわかれつらゆき

君こふる涙しなくば唐衣むねのあたりは色もえなまし

題しらす

世水と池もに流てぞ行涙川冬もこほらぬみ水な池なりけり

夢ぢにもつゆやをくらんよもすがらかよへるそでのひぢてかはかぬ

そせい法し

はかなくて夢にも人を見つるよは朝の床ぞおきりかりける  
御人子三平  
秋評

ふぢはらのたふさ

いつはりの涙なりせば唐衣しのびに袖はしほらざらまし

和詞

大江千里

ねになきてひぢにしかども春雨にぬれにし袖とはどこたえよ

としゆきの朝臣

わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよたよ鳴らむ

つらゆき

さ月山こずゑを高め時鳥なくねぞらなるこひもするかな  
五山  
山登着

凡河内みつね

秋ぎりのはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもほえなくに  
秋意も心に  
覚えぬ

清原ふかやぶ

虫のごとこゑにたてゝはなかねども涙のみこそしたにながるれ

これさだのみこの家の哥合のりた  
よみ人しらず

秋なれば山とよむまで鳴鹿に我おとらめやひとりぬるよは

題しらす

つ ら ゆ き

あきのゝにみだれてさける花の色のちくさに物を思ころ哉

紅葉のそよみみづく有ク  
果もとりけつ

ね

ひとりして物を思へば殊の田のいなばのたよといふ人のなき

ふ か や ぶ

人を思心ばかりにあらねどもくも井にのみもなきわたるかな

た ど み ね

秋風にかきなすこと梅鳴るも秋のこゑにさへはわがまありかなく人のこひしかるらん

つ ら ゆ き

こもかるよどのさは水雨ふればつねよりことにまさる我戀

やまとに侍ける人につかはしける

えぬまはよしのゝ山の櫻花人づてにのみきゝわたるかな

やよひ許に、物のたうびける人のもとに、又人まかり

物のまかり



つとせうそこすときよて、よみてつかはしける

露ならぬ心を花にをきそめて風吹ごとに物思ぞつく

題しらす

坂上これのり

我こひにくらぶの山のさくら花まなくちるともかずはまさらじ

(比がて 脂部みとて)

むねをかのおほより

冬川のうへはこほれる我なれやしたに流てこひわたるらん

たゞみね

たぎつせに木ざしとどめぬうき草のうきたる戀も我はするかな

ともりのり

よひく<sup>れ</sup>にぬぎて我ぬるかり衣かけておもはぬ時のまもなし

まつまぢのさやの中山中<sup>なかつまぢ</sup>になに<sup>なにな</sup>か人を思<sup>おも</sup>そめけん

しきたへの枕のしたに海はあれど人をみるめはおひずぞ有ける

年をへてきえぬ思は有ながらよるの袂は猶こほりけり

つらゆき

我こひはしらぬ山ぢにあらぬにまよふ心ぞわびしかりける

紅のふりいでつゝなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ

白玉と見えし涙も年ふればからくれなるにうつろひにけり

夏むしをなにかいひけむ心から我もおもひにもえぬべらなり

風ふけば峯にわかるゝ白雲のたえてつねなき君が心か

月影に我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとやみん

戀しなばたがなはたゝじ世中のつねなき物といひはなすとも

つづくにのなにはのあしのぬもはるにしげき我戀人しるらめや

手もふれで月日へにけるしらまゆみおきふしよるはいそねられぬ

人しれぬおもひのみこそわびしけれ我なげきをばわれのみぞしる

外人の力

見文の 目も遠下

き ねららぬゆ

一向下

思ひ入る

お辞

良

ことにいであいはぬ許ぞみなせ河したにかよひてこひしき物を

水あはれ川  
うげんく水の川  
と も の り

君をのみ思ねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

み つ ね

いのちにもまさりておしくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり

た じ み ね

梓弓ひけばもとすゑ我かたによるこそまされ戀の心は

梓弓ひけばとすゑ我かたによるこそまされ戀の心は

はるみちのつらき

み つ ね

我こひはゆくゑもしらずはてもなしあふをかぎりとおもふばかりぞ  
われのみぞ悲しかりけるひこぼしもあはですぐせる年しなければ

軽待頭語

ふ か や ぶ

今はゝやこひしなましを(あ)ひみむとたのめし事ぞ命なりける

み つ ね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

と も の り

命やはなにそは露のあが物をあふにしかへばおしからなくに

命やはなにそは露のあが物をあふにしかへばおしからなくに



古今和歌集卷第十三

戀哥三

やよひのついたちより、しのびに人に物らいひてのち

に、あめのそぼふりけるに、よみてつかはしける

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとに、よみてつか

はしける

長雨下詠めもろけく  
混歌

としゆきの朝臣

つれづれのながめにまさる涙河そでのみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて、返しによめる

なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへ流るときかばたのまむ

題しらず

よみ人しらず

よるべなみ身をこそとをくへだてつれ心は君が影となりなき

昔ながらの歌

長雨下詠めもろけく

いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまほしさにいざなはれつゝ  
あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにつねべき物を

この哥は、ある人のいはく、柿本人麿が哥也

びん延音

殊のゝに篠わけしあさの袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける  
なりひらの朝臣

海嶺

爰と満

腫れがら

小野小町

見るめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

源宗于朝臣

あはずしてこよひあけなば春の日のながくや人をつらしとおもはん

みぶのたどみね

有明のつれなく見えし別より曉ばかりうきものはなし

ありはらのもとかた

逢事のなきさにしよる浪なれば浦見てのみぞたちかへりける

よみ人しらす

海嶺

浪

遠はののり丸のまゝ忠でう

たれは

まゝのま

かねてより風にさきだつ浪なれやあふ事なきにまたき立らん

た と み ね

陸奥 名取川  
みちのくにありといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまだきなきなの龍田川わたらでやまむ物ならなくに

も と 教 材 た

人はいさ我はなきなのおしければ昔も今もしらずとをいはん

よみ人しらず

こりすまに又もなきなは立ぬべし人にくからぬ世にしすまへば

ひんがしの五条わたりに、人をしりをきて、まかりか

よひけり、しのびなる所なりければ、かどよりしもえ

いらで、かきのくづれよりかよひけるを、たびかさな

りければ、あるじきゝつけて、かのみちに、夜ごとに

人をふせてまもらすれば、いきけれど、えあはでのみ



かへりきて、よみてやりける

人しれぬ我かよひ路のせきもりはよひくごと

題しらず

しのぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでこそくれ

逢ふもむげん

よみ人しらず

こひくてまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなん

鶏

秋のよもなのみなりけりあふといへばことそともなくあけぬる物を

凡河内みつね

長しとおもひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋のよなれば

楓

しのよめのほがらくとあけゆけばをのかきぬくなるぞかなしき

藤原國經朝臣

あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬおもひそふらむ

梅頭読

なりひらの朝臣

つらゆき

あじきのぬ

光のら

人体

鈴を自らの物

みり人しらす

今は時を思ふ

なせ

ひやむ知る

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

としゆきの朝臣

明ぬとて歸みちにはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ

題しらず

籠一説ウツ  
一説テヨウ用之

しのよめの別をおしみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

よみ人じらぞ

郭公夢かうつゝかあさつゆのおきて別しあかつきのこゑ

玉匣あけば君がなたちぬべみ夜深くこしを人見けむかも

美科

強評

大前江

千里

けさはしのおきけむ方もしらざりつ思いつるぞきえてかなしき

人にあひて、あしたによみてつかはしける 暁を交まらむらの朝臣

ねぬるよの夢をはかなみまどろめばやはかなにもなりまさる哉

業平朝臣の、伊勢のくにまかりたりける時、齋宮な

りける人に、いとみそかにあひて、又のあしたに、人

やるすべなくて、おもひをりけるあひだに、女のもと

起き休  
翁の道々  
年七バ

報告書(い)あつて落るといふ

はひの  
假体より

よりをこせたりける

夢見まが

よみ人しらす

君やこし我や行けむおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

返し

世間の人意  
なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとはよひとさだめよ

よみ人しらす

美指 祝題しらす

むば玉のやみのうづはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

さよふけてあまのとわたる月影にあかずも君をあひみつるかな

君が名も我なもたてじなにはなるみつともいふなあひきともいはじ

名とり川せいのむもれ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけん

遠るこも吉野川水の心ははやくともたきのをとにはたてじとぞおもふ

禁止の詞

徳のよみ悔

序

強行

花すゝきほにいでゝこひばなをおしみましたゆふひものむすぼゝれつゝ

をのゝはるかぜ

たちばなのきよきが、しのびにあひしれりける女のもの

結ばる

遠のきく埋めし村木



冬の池にすむには鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな  
襦のはにをくはつしもの夜をさむみしみはつくとも色にいでめやは

いひり 知るか類 衣

山しなのをとほの山のをとにだに人のしるべく我戀めかも 及初拜

風聞

水

よみ人しらす

この哥、ある人、あふみのうねめのとなむ申す

みつ塩のながれひるまをあひがたみ見るめのうらにはるをこそまで

子と子明

海松とかけ

きよはらのふかやぶ

白河のしらずともいはじ底きよみ流てよ々にすまむとおもへば

ながら(し)の物

平 定 文

したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人なとがめそ

如く

放浪とむ

のり

我こひをしのびかねてはあし引の山橋の色にいでぬべし

大抵

よみ人しらす

おほかたは我なもみなとこぎいでなむ世をうみべだにみるめすくなく

夏とかけ

海松と見なく

拜馬の種  
兼し間

枕より又しる人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

平 定 文

よみ人しらず

風ふけば浪うつ岸の松なれ（ヤ）ねにあらはれてなきぬべらなり

この哥は、ある人のいはひ、柿本人麿がなり

池にすむなを（名）惜（む）む（む）く（む）駕（む）奇（む）と（む）り（む）の（む）水（む）を（む）淺（む）み（む）か（む）く（む）ると（む）す（む）れ（む）ど（む）あ（む）ら（む）は（む）れ（む）に（む）け（む）り

あふ（む）こ（む）とは（む）玉（む）のを（む）は（む）かり（む）な（む）の（む）た（む）つ（む）は（む）よ（む）し（む）ゆ（む）の（む）た（む）ぎ（む）つ（む）せ（む）の（む）ご（む）と

むら鳥のたちにしわがな今更に事なし（ふ）とも（む）し（む）る（む）し（む）あら（む）め（む）や

君により我なは花に春霞野にも山にもたちみちにけり（竹）者（の）の（竹）塔（の）屋（の）邊（の）

（パ）ン（ト）高（ク）立（ツ）と（言）勢

しるといへば枕だにせでねし物をちりならぬなの空にたつらむ



古今和歌集卷第十四

戀哥四

題しらす

讀人しらす

みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人にこひやわたらん  
あひみずばこひしき事もなからましをとにぞ人をきくべかりける

いその神ふるのなか道中くくにみずばこひしとおもはましやは

君といへば見まれみずまれふじのねねのめづらしげなくもゆる我戀

夢にだに見ゆとは見えじあさなく我おもかけにはづる身なれば

よみ人しらす

見ゆるはまはま  
見ゆるはまはま

伊勢

見るはまはま  
見るはまはま  
ふぢはらのたゞゆき

ゆるき  
ゆるき

ゆるき



いしま行水の白浪たちかへりかくこそは見めあかずもあるかな  
伊勢のあまのあさなゆふなにかづくてふみるめに人をあくよしもがな

昔くといふり  
海印  
見よすと

ものり

春霞たなびく山の櫻花みれどもあかぬ君にも有かな

道理の奥い

心をぞわりなき物と思ぬる見るものからやこひしかるべき

りがら  
反ふ  
か  
や  
ぶ

東木の移り人の離るるを思ふ

凡河内みつね

かれはてむ後をばしらで夏草の深くも人のおもほゆるかな

よみ人しらず

あすか河ふちは瀬になる世なりともおもひそめてむ人はわすれじ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

思てふ事のはのみや秋をへて色もかはらぬものには有らん

題しらず

貴流

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらんうぢのはし姫

又は、うち玉ひめ

君やこむ我やゆかむのいざよひに槓のいた戸もさすねにけり

そせい法し

今こむといひしばかりに長月のあり明の月をまちいでつるかな

夜

月夜よしよしと人にづげやらばこてふにたりまたず

君こずばねやへもいづこ紫わがもとゆひに霜はをくとも

宮城のよもとあらの小萩露をよみ風をまつごと君をこそまて

あなこひし今もみてしか山がつのかきほにさけるやまとなでしこ

つのくにのなにはおもはず山しろのとはにあひみんことをのみこそ

難波何ぞよけれ

しきしまのやまとはあらぬ唐衣ころもへずして逢よしもがな

かやぶ

戀しとはたがなづけむ事ならんしぬとぞたどにいふべかりける

帯り道きよき

三類もぬと

冬令節

よみ人しらす

元節

よみ人しらす

養神

才

鳥羽

常をかく

死

かやぶ

東と西の



かすくにおもひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

美辨

ある女の、なりひらの朝臣を、所さだめずありきす、

とおもひて、よみてつかはしける

よみ人しらず

おほぬさのひくてあまたになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

返し 引さ

なりひらの朝臣

おほぬさとなにこそたてれ流てもつるによるせはありてふ物を

題しらす

風吹く

縁色はよぬみ人しらず

すまのあまの塩やく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし

いたが里によかれをしてか時鳥たごころにしもねたるこゑする

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

偽と思物からいま更にたがまことをか我はたのまむ

素性法師

笑語

傍りて色をの深さ

秋風に山の木のはのうつろへば人のこゝろもいかゞとぞおもふ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

ともの身

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

祝題しらず

歌辞

よみ人しらず

空蟬の世の人ごとのしげゝれば忘ぬものゝかれぬべらなり

あかてこそ思はむ中ははなれなめそをだに後の忘がたみに

忘なむと思心のつくからに有しよりのこまづそこひしき

わすれなん我をうらむな郭公人の秋にはあはむともせず

たえず行あすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

この哥、ある人のいはく、なかとみのあづま人が哥也

よど河のよどむと人はみるらめど流て深き心あるものを

極み

流て深き心あるものを

そこひなきふちやはさはぐ山川の浅きせにこそあだ浪はたて

よみ人しらず

浪もあだの浪

〇 紅のはつ花ぞめの色深くおもひし心われわすれめや

河原左大臣

みちのくのしのぶもちすり誰ゆへにみだれむと思我ならなくに

みちのくにのしのぶ

すり

よみ

人しらす

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる裏うくる

どし知らなくに

心し秋のもみぢならねば

あまのすむさとのしるべにあらなくにみむとのみ人のいふらむ

瘦ることいひ

満見む

根をたしもづけのをむね

くもり日の影としなれる我なればめにこそみえね身をばはなれず

つづ

らゆき

色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもほえなくに

よみ人しらす

めづらしき人をみむとやしかもせぬ我したひものどけわたるらん

延も海ぬ

延も海ぬ

延も海ぬ

かげろふのそれかあらぬかはるさめのふるひとなれば袖ぞぬれぬる  
 ほり江こぐたなゝしを舟こぎかへりおなじ人にや戀わたりなん

伊勢

わたつみとあれにしとこをいまさらにはらはと袖やあわとうきなむ

いにしへに猶立歸るこゝろかなこひしきことに物わすれせで  
 人を、しのびにあひしりて、あひがたくありければ、

その家のあたりをまかりありきけるおりに、かりのな

くをきゝて、よみてつかはしける 大伴くろぬし

○思いでゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや

右のおほいまうちぎみ、すまずなりにければ、かのむ

かしをこせたりけるふみどもを、とりあつめて返すと

て、よみてをくりける 典侍藤原よるかの朝臣

たのめこしことは今は返してむ我身ふるればをき所なし

お久も 暮まげ

物いばら  
近院の右のおほいまうちぎみ

今はとて返すことのはひろひをきてをのが物からかたみとやみん

美稱 祝題しらす

よるかの朝臣

玉梓の道は常にもまとはなん人を問とも我かとおもはむ

よみ人しらす

まてといはとねてもゆかなんしひてゆくこまのあしおれまへのたなばし

中納言源のよぼるの朝臣の、あふみのすけに侍ける時、

よみてやれりける

閑 院昇延喜八年中納言九年  
院昇延喜十四年中納言

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきよをなくくもみめ

題しらす

伊

勢

故郷にあらぬ物から我ために人の心のあれて見ゆらむ

寵

山がつかきほにはへるあをつら人はれどもことづてもなし

香の義

さかめの人ざね酒井人真



おほぞらはこひしき人のかたみかは物思ごとにながめらるらむ

よみ人知らず

石動群

あふまでのかたみも我はなにせんにみても心のなぐさまなくに

おやのまもりける人のむすめに、いとしのびてあひて、

物らいひけるあひだに、おやのよぶ、といひければ、

いそぎてかへるとて、もをなむぬぎをきていりにける、

そのうち、もを返すとてよめる

おきかぜ

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり

題しらず

よみ人しらず

かたみこそ今はあだなれこれなくばわするゝ時もあらまし物を

仇體可

古今和歌集卷第十五

戀哥五

五条のきさいの宮のにし西對のたいに、すみける人に、ほ

いにはあらで、物いひわたりけるを、む月の十日あま

りになむ、ほかへかくれにける、あり所はきよけれど、

え物もいはで、又のとしの春、梅の花ざかりに、月の

おもしろかりける夜、こそをこひて、かのにし西對のたい

にい西對きて、月のかたぶくまで、あはらなるいたじきに

ふせりてよめる

在原業平朝臣

月西對あらぬ春西對や普の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

題しらず

花すゝき我こそ西對たにおもひしかほ西對にい西對いでゝ人にむすばれにけり

藤原なかひらの朝臣仲把左大臣

よそにのみきかまし物を音羽川わたるとなしに見なれそめけん

わがごとく我をおもはむ人もがなさてもやうきと世を心みむ  
凡河内躬恒

人も思ひく  
憂き  
もとかた

久かたのあまつそらにもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる

聖律  
よみ人しらず

みても又またも見まくのほしければなるゝを人はいとふべらなり

花と摘み  
雲もなくなきたるあさの我なれやいとほれてのみよをばへぬらん  
よみ人しらず

花と摘み  
のなる花

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘れぬらん数ならぬ身は

うきめのみおひてながるる浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

夏駒水駒  
藤原かねすけの朝臣

伊勢

第 十 卷  
打 頻  
便 方 付

をひにあひて物思ころの我袖にやどる月さへぬるゝがほなる

秋ならでをく白露はね覺する我手枕のしづくなりけり

すまのあまのしほやき衣おさをあらみまどをにあれや君がきまさぬ

山しろのよどの若ごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なにゝふかめておもひそめけん

玉かづら今はたゆとや吹風のをとにも人のきこえざるらむ

我袖にまだき時雨のふりぬるは君がこゝろに秋やきぬらん

山の井の浅き心もおもはぬを影ばかりのみ人の見ゆらむ

忘草たねとらましをあふことのいとかくかたき物としりせば

こふれどもあふよのなきは忘草ゆめぢにさへやおひしげるらん

夢にだにあふことかたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝと

浪大はむけい法し

もろこし支那も夢にみしかば近かりきおもはぬ中ぞはるけかりける

歌の終る長南降るとりけ 野の端

さだのゝぼる貞朝臣登仁明御子 備中守

獨のみながめふるやのつまなれば人を忍の草ぞおひける

古屋をとりけ

僧正へんぜう

我やどは道もなきまで荒にけりつれなき人をまつとせしまに

今こむといひて別し朝よりおもひくらしのねをのみぞなく

未のや

思ひ暮らし 蛸のけり

よみ人しらす

こめやとは思物からひぐらし知ののなくゆふぐれはたちまたれつゝ

いまし強弱はとわびにし物をさ知のが知のこの衣にかゝり我をたのむる

今はこじと思物から忘つゝまたるゝ事のみたまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

うへ相あていにし秋田かるまで見えこねばけさはつかりのねにぞ鳴ぬる

こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらん

ひさしくも成にけるかなすみの江の松はくるしき物にぞ有ける

結ぶる

待つ程  
久の河前  
序

住の江の松ほどひさに成ぬればあしたづのねになかぬ日はなし

なかひらの朝臣あひしりて侍けるを、かれ方なりに

ければ、ちゝが、やまとのかみに侍けるもとへまかる

とて、よみてつかはしける

伊 勢

みわの山いかにまちみむ年ふとも尋る人もあらじとおもへば

題しらず

兼 雲林院のみこ 常康親王 仁明御子

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりも行か人の心の

をのゝこまち

今はとて我身時雨にふりぬればことのはさへにうつろひにけり

返し

小野さだ さ貞嗣

人をおもふ心このはにあらばこそ風のまにくちりもみだれめ

なりひらの朝臣、きのありつねがむすめにけりけるを、

うらむることありて、しばしのあひだ、ひるはきて、

娘の骨下り

天あまゆふさはかへりのみしければ、よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなり行かかすがにめにはみゆる物から

返し

経る

行かへりそらにのみしてふることは我る山の風はやみなりなり

なりひらの朝臣

題しらす

看別あはは

心こころ怒おこるかげのりのおほきみ

から衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひむとおもひし

泡う

休やすみ吹ふきとほる

秋あき

とも のり

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん

源宗于朝臣

つれもなくなり行人のことのはぞ殊よりさきの紅葉なりける

こゝちそあなへりけるころ、あひしりて侍ける人のと

はで、心ちをこたりてのち、とぶらへりければ、よみ

てつかはしける

兵

衛藤氏高朝朝臣

しでの山ふもとをみてぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

あひしれりける人の、やうやくかれがたになりけるあ

ひだに、やけたるちのはに、ふみをさしてつかはせり

ける

*枯れゆく草*

*小野の茅*

こまちがあね

時すぎてかれゆくをのよあさぢには今は<sup>火</sup>ぞたえずもえける

物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに、野火の

もえけるをみてよめる

*燃えがら*

*鶉伊*

勢

冬枯ののべとわが身をおもひせばもえても春をまたまし物を

題しらす

*長ら*

とものり

水のあはのきえてうき身といひながら流て猶もたのまるゝかな

*消えがら*

よみ人しらす

みなせ川ありて行水なくばこそつるに我身をたえぬとおもはめ

*我が身の存をよげ*

*み* *つ* *ね*

よしの河よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれじ

*死*

よみ人しらす



世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有ける

心こそうたてにくけれそめざらばうつろふ事もおしからまし

及効律

こまち

色みえでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有ける

鶯と暮をいけ

よみ人しらず

我のみやよを鶯となきわびむ人の心の花とちりなば

そせ法し

おもふともかれなむ人をいかせむあかずちりぬる花とこそみめ

よみ人しらず

今はとて君がよれなばわが宿の花をばひとりみてやしのぼん

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜はをかなむ

寛平御時、御屏風にうたかへせたまひける時、よみて

かきける

そせい法し

忘草なにをかたねとおもひしはつれなき人の心なりけり

題しらす

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人の

あは

あは

きのつらゆき

はつかりのなきこそ渡れ世中の人の心の秋しうければ

よみ人しらす

あはれともうしとも物を思時などか涙のいとなかるらむ

身をうしとおもふにきえぬ物なればかくてもへぬる世にこそ有けれ

あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ

あひみぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくるひも哉

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

すがのゝたゞをむ忠臣

つれなきを今はこひじと思へども心よはくもおつる涙か

典侍藤原直子朝臣

秋

題しらす

伊

勢

人しれずたえなましかば侘つゝもなきなぞとだにいほまし物を  
つらいのだがが法まゐる。

よみ人しらす

聞く人

それをだにおもふ事とてわがやどを見きとないひそ人のきかくに  
あふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ  
侘はつる時さへ物のかなしきはいづこをしのぶなみだなるらん

暮小

藤原おきかぜ

怨てもなきてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

夕されば人なき床をうちはらひなげかむためとなれる我身か  
よみ人しらす

わたつみの我身こそ浪立歸あまのすむてふらみつるかな  
あらを田をあらすき返し人も人の心を見てこそやまめ

ありそらみのはまのまざごとたのめしは忘ることのかずにぞありける  
あしべより雲をさして行かりのいや遠ざかる我身かなしも

盧辺

しぐれつゝもみづるよりもことの心の焔あまにあふぞわびしき  
秋風のふきと吹ぬるむさし野はなべて草ばの色かはりけり

小 町

秋風にあふたのみこそ悲けれわが身むなしく成ぬとおもへば

平 さ だ ぶ ん

あき風の吹うらかへすくずのはのうらみても猶うらめしき哉

夏 見葉をよみ人しらず

秋といへばよそにぞきゝしあだ人の我をふるせるなにこそ有けれ  
わすらるゝ身をぢはしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人もかよはず

坂上 これのり

あふことをながらのはしのながらへて戀わたるまに年ぞへにける

と も の り

傳つたへて憂うれひ 遺のこりの物もの 身みの流ながれぬ身は

身みの流ながれぬ身は  
遺のこりの物もの

男<sup>ヲ</sup>仲<sup>ヲ</sup>ま<sup>シ</sup>ば<sup>ス</sup>

流ては<sup>ハ</sup>いも<sup>セ</sup>の山<sup>ノ</sup>の中<sup>ニ</sup>におつる<sup>ル</sup>よし<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>河<sup>ノ</sup>のよし<sup>ノ</sup>や世<sup>ノ</sup>中

手<sup>ヘ</sup>の<sup>ヲ</sup>ま<sup>シ</sup>の<sup>ヲ</sup>

よみ<sup>ニ</sup>人<sup>シ</sup>ら<sup>ズ</sup>

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりにける時よめる

三途川

なく涙雨とふらなん渡川水まさりなばかへりくるかに

助緯  
小野たかむらの朝臣

さきのおほきおほいまうちぎみを、白河のあたりにを

忠仁公

くりける夜よめる

延喜之比太政大臣只二人仍  
難不辭官前卜書前後之由也

ちの涙おちてぞたぎつ白河は君がよまでの名にこそ有けれ

ほりかはのおほきおほきおほいまうちぎみ、身まかり

太政大臣朝白始

にける時に、ふかくさの山におさめける後によみける 僧 都 勝 延  
空蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて

深草のよべの櫻し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

かむつけのみねを著雄

深草のよべの櫻

同情

延喜

藤原敏行朝臣の、身まかりにける時に、よみてかの家

につかはしける

見事

きのとものり

ねてもみゆねでもみえけりおほかたはうつせみの世ぞ夢には有ける

あひしれりける人の、身まかりにければよめる

きのつらゆき

夢とこそいふべかりけれ世中にうつある物と思けるかな

あひしれりける人の、身まかりにける時によめる

みぶのたゞみね

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなきよをもうつとはみず

あねの、身まかりにける時によめる

せをせけばふちとなりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき

藤原のたゞふさが、むかしあひしりて侍ける人の、身

まかりにける時に、とぶらひにつかはすとてよめる

閑 院

さきだぬくみのやちたびかなしきはながるゝ水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりにける時、よめる

つ ら ゆ き

あすしらぬ我身とおもへどくれぬまのけふは人こそ悲かりけれ

若と百のは  
あふたふ

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるをみるだに戀しきものを

はまがおもひにてよめる

神無月時雨にぬるもみちばたどわひ人のたもとたりけり

ちまがおもひにてよめる

藤衣はつるゝいとほ侘人の涙の玉のをとぞなりける

おもひに侍ける年の秋、山でらへまかりけるみちにて

よめる

朝露のおくての山田かりそめにうき世中を思ぬる哉

おもひに侍ける人を、とぶらひにまかりてよめる

すみ染の君が袂は雲なれやたえず涙の雨とのみふる

女のおやおもひにて、山でらに侍けるを、ある人の

とぶらひつかはせりければ、返事によめる

葦引の山べに今はすみ染の衣の袖はひる時もなし

よみ人しらす

(あ)

難

解

晩

引(假初)

見

たよみね

たよみね

たよみね

つらゆき

たよみね



諒闇のとし、池のほとりの花をみてよめる

親に清くる美

鮮明

面影

だかむらの朝臣

水のおもにしづく花の色さやかに君がみ影のおもほゆるかな

深草のみかどの御國忌の日、よめる

文室やすひで

草深き霞の谷に影かくして日にくれしけふにやはあらぬ

ふかくさのみかどの御時に、藏人頭にて、よるひるな

れつかうまつりけるを、諒闇になりければ、さらに

世にもまじらずして、ひえの山にのぼりて、かしらお

いかるしてけり、その又のとし、みな人、御ぶくぬぎて、

あるはかうぶりたまはりなどよろこびけるをきよてよ

める

僧正遍昭藏人頭右近少將内膳  
宗貞

みな人は花の衣になりぬなり昔のたもとよかはきだにせよ

河原のおほいまうちぎみの、身まかりての秋、かの家

のほとりをまかりけるに、もみぢのいろ、まだふかく

もならざりけるを見て、かの家によみていれたりける

半蔵

新井

龍行文徳源氏子時大納言左大將民部卿三太子御  
近院右のおほいまうちきみ

うちつけにさびしくもあるかみちばもぬしなき宿は色なかりけり

藤原高經朝臣の、身まかりての又のとしの夏、郭公の

なきけるをきよてよめる

つ ら ゆ き

郭公けさなくこゑにおどろけば君をわかれし時にぞ有ける

櫻をうへてありけるに、やうやく花さきぬべき時に、

かのうへける人身まかりにければ、その花をみてよめ

る

花よりも人こそあだに成にけれいづれをさきにこひんとかみし

きのもちゆき 残行

あるじ身まかりにける人の家の、梅の花をみてよめる つ ら ゆ き

色もかも昔の<sup>あつ</sup>ごさに匂へどもうへけむ人の影ぞこひしき

河原の左のおほいまうちきみの、身まかりてのゝち、

かの家にまかりてありけるに、しほがまといふ所なさ

まを、つくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまの浦さびしくもみえわたる哉

座さび

心淋くもよみ

藤原のとしもとの朝臣の、右近中將にてすみ侍けるさ

うしの、身まかりてのち、人もすまずなりにけるに、

秋の夜ふけて、ものよりまうできけるついでに見いれ

ければ、もとありしせんざいも、いとしげくあれたり

けるを見て、はやくそこに侍ければ、むかしを思やり

てよみける

みはるのありすけ

君がうへし一むら薄むしのねのしげきのべとも成にけるかな

これたかのみこの、ちゝの侍けむ時によめりけむうた

ども、とこひければ、かきてをくりけるおくに、よみ

てかけりける

希望の程

のり

ことならばことのはさへもきえなみれば涙のたぎまさりけり

題しらず

よみ人しらず

なき人のやどにかよはと郭公かけてねにのみなくとつげなん

死ぬこと

言の葉

心淋く

泣る

誰みよと花さけるらむ白雲のたつとはやくなりにし物を

式部卿のみこ、閑院の五のみこにすみわたりけるを、

いくばくもあらで、女みこの身まかりにける時に、か

のみこすみける帳のかたびらのひもに、ふみをゆひつ

けたりけるを、とりてみれば、むかしの手にて、この

うたをなむ、かきつたりける

かすくゝに我を忘ぬ物ならば山の霞をあはれとは見よ

おとこの、人のく他國にまかれりけるまに、女にはかに

やまひをして、いとよはくなり魂にける時、よみをきて

身まかりにける 魂 善い 休よみ人しらず

こゑをだにきかでわかる玉より大なきとこにねん君ぞかなしき

やまひにわづらひ侍ける秋、こゝちのたのもしげなく

おほえければ、よみて、人のもとにつかはしける 大 江 千 里

もみち葉を風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけり

身まかりなむとてよめる

藤原とれもと

露をなどあだなる物とおもひけんわが身も草にをかぬばかりを

やまひして、よはくなりける時よめる

なりひらの朝臣

つゝる死を行道とはかねてきゝしかど昨日けふとおもはざりしを

かひのくに、あひしりて侍ける人とぶらはむとて、

まかりけるを、みち中にて、にはかにやまひをして、

いまくとなりにければ、よみて、京にもてまかりて、

母にみせよといひて、人につけ侍けるうた

在原しげはる

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限のかどでなりけり

エキカヒ、  
往反道、  
甲斐路、  
等々

は、お、ん、た、る、の、も、と

古今和歌集卷第十七

雜哥上

題しらす

我うへに露ぞをくなる天河とわたる船のかいのしづくか  
おもふどちまるとるせる夜は唐錦たまくおしき物にぞ有ける

限なき君が爲にと折花はとき  
ある人のいはく、この哥は、さきのおほいまうちぎみの也

紫のひともとゆへにむさしの草はみながらあはれとぞみる

めのおとらとをもて侍ける人に、うへのきぬををくる  
とて、よみてやりける  
なりひらの朝臣

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

見えり遠いト

未東の物知新

讀人しらす

御書長を... 故我に... 起たま...

高平六年五月五日中納言門從三位  
大納言ふぢはらのくにつねの朝臣の、宰相より中納言

色相いろさうになりける時に、そのぬうへのきぬのあやをよくと  
てよめる。物の風流ものふうりゅうやおもむさぶりのほの、于時大納言左大將  
近院右のおほいまうちぎみ

色なしと人やみるらむ昔より深き心にそめてし物を

いそのかみのなむまつが、宮づかへもせで、いそのか

みといふ所にこもり侍けるを、にはかに、かうぶりた

まはれりければ、よろこびいひつかはすとて、よみて

つかはしける 敷

日のひかりやぶひわかねばいそのかみふりにし里むらに花もさきけり

高平貞觀八年二月女御 十年十二月生第一皇子 十一年三月爲皇太子 元慶元年  
二条のきささきの、まだ東宮のみやすん所と申しける時

正月即位日爲中宮 六年正月爲太皇宮  
に、大原野にまうで給ける日よめる 春宮母儀女御也  
なりひらの朝臣

おほはらやをしほの山もけふこそは神世のこともおもひいづらめ

五節のまひよめをみてよめる よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢ吹とぢよをとめのすがたしはしとよめむ

五節のあした、かむぎしのたまのおちたりけるを見て、

たがならむと、とぶらひてよめる

河原左のおほいまうちぎみ

ぬしやたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

寛平御時に、うへのさぶらひに侍けるをのことも、かめ

おほい

をもたせて、きさいの宮の御方に、おほみきのおろし、

ときこえにたてまつりたりけるを、くら人どもわらひ

て、かめをおまへにもていでし、ともかくもいはずな

りにければ、つかひのかへりきて、さなむありつると

いひければ、くら人のなかにをくりける

としゆきの朝臣

玉だれのこがめやいづらこよ乃ぎのいその浪わけおきにいでにけり

女どもの、みてわらひければよめる 小湊の磯 けむけいほうし

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなん

方たがへに、人の家にまかれりける時に、あるじのき

ぬをさせたりけるを、あしたにかへすとてよめる きのとも のり



蟬のはのよるの衣はうすけれどうつりかこくも匂ぬるかな

題しらず

秋辭

よみ人しらず

をそくいづる月にもある哉葦引の山のあなたもをしむべらなり  
わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

大概

なりひらの朝臣

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるに

月おもしろしとて

よめる

貴子の行の

きのつらゆき

かつみれどうとくもあるかな月影のいたらぬさともあらじとおもへば

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物とおもひしをみなそこに山のはならでいづる月かけ

題しらず

水肌

よみ人しらず

あまの河雲のみにてはやければひかりとよめず月ぞながるゝ

あかずして月のかくるゝ山本はあなたおもてぞこひしかりける

山本

聖子代始齋院  
 天安元年二月  
 轉之共事配世  
 莫知云々若元  
 皇又有此事歟  
 遂被廢  
 元慶五年正月  
 六日傳以逃子  
 爲齋院母同惟  
 喬二年自退

これたかのみこの、かりしけるともにまかりて、やど  
 りにかへりて、夜ひとよさけをのみ、物がたりをしけ  
 るに、十一日の月もかくれなむ、としけるおりに、み  
 こゑひて、うちへいりなむとしければ、よみ侍ける  
 なりひらの朝臣  
 あかなくにまだきも月のかくる、<sup>か山</sup>のはに<sup>聖子</sup>けていれずもあらなん

たむらのみかどの御時に、齋院に侍けるあきらけいこ  
母藤別子從五位上是雄女  
 のみこを、は、あやまちありといひて、齋院をかへら  
 れむとしけるを、その事やみにければよめる

おほぞらをてり行月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに

題しらず

序

よみ人しらず

いそのかみふるからを、のもとがしは本の心はわすられなくに  
 いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ  
 いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありし物也

あま敬信上るかの朝臣母  
 湘大御所の姓

今こそあれ我も昔はおとこ山さか行時もありこしものを

世中にふりぬる物はつのにのながらのはしと我となりけり

さゝのはにふりつむ雪のうれをよもみ本くたち行我さかりかも

おほあらしのもりのした草おいぬればこまもすさめずかる人もなし

又は、さくらあさのをふのしたぐさおいぬれば

かぞふればとまらぬ物をとじといひてことしはいたくおいぞしにける

おしてるやなにはのみつにやく塩のからくも我はおいにけるかな

又は、おほとものみつのはまに

おいらくのかむとしりせばかどさしてなしとこたへてあはざらましを

この三つの哥は、むかし有けるみたりのおきなよめるとなむ

さかさまに年もゆかなんとりもあへずすぐるよはひやともにかへると

とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうとすぐしつる哉

とよめあへずむべも年とはいはれけりしかもつれなくすぐるよはひか

鏡山いざたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老やしぬると

あはれ

茶行

兼行

道ひこ

兼行

この哥は、ある人のいはく、大伴のくろぬしが也

業平朝臣のは伊登高親十領武皇女貞觀三年九月薨のみこ、長をかすみ侍ける時に、な

りひら、宮づかへすとて、時くもえまかりとぶらは

ず侍ければ、しはす許に、はのみこの許より、とみ

のこととて、ふみをもてまうできたり、あけてみれば、

ことばもなく、ありけるうた

老ぬればさらぬ別も有といへばいよく見まくほしき君哉

返し

業平朝臣

○世中にさらぬわかれのなくもがなちよもとなげく人のこのため

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

在原むねやな

白雪のやへふりしけるかへる山かへるぐもおいにけるかな

おなじ御時の、うへのさぶらひにて、をのこどもに、

おほみきたまひて、おほみあそびありけるついでに、

つかうまつれる

としゆきの朝臣

領・平・朝臣の意

老ぬとてなどかわが身をせめきけんおいずばけふにあはまし物か

題しらす

よみ人しらす

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思年のへぬれば  
我見てもひさしく成ぬすみの江の岸の姫松いくよへぬらん

住吉の岸のひめ松人ならばいくよかへしとはまし物を

梓弓いそべの小松たが世にかよろづよかねてたねをまきけん

この哥は、ある人のいはく、柿本の人まろが也

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のおのへにたてる松ならなくに

藤原おきかせ

誰かも知人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

結るよみ人しらす

わたつ海のおきつしほあひにうかぶあわのぎえぬ物からよる方もなし

わたつうみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路嶋やま

わたの原よせくる波のしばくも見まくのほしき玉津嶋かも

糸系の曲物前ぶらまき

道めさ(幸むらるゝこと)

海神の力  
淵の淵  
誰かも知人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

なにはがたしほみちくらしあま衣たみのしまにたづなきわたる

貫之がいづみのくに侍ける時に、やまとよりこえま

うできて、よみてつかはしける

藤原たふさ

君を思ひおきつの濱になくたづの尋くればぞ有とだにきく

返し

つらゆき

おきつ浪たかしのはまの濱松のなにこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

なにはがたおふる玉もをかりそめにあまとぞ我はなりぬべらなる

あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかは

しける

みぶのたふみね

住吉とあまはつぐともながるすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時、たみのしまにて、雨にあひ

てよめる

つらゆき

雨によりたみのしまをけふゆけどなにはかくれぬ物にぞ有ける

一本にきたれども

難波と書きたり

理より  
浪の浜  
その

住吉

たづな

法皇、にし河におはしましたりける日、つるすにたてり、といふことを題にて、よませたまひける

あしたづのたてる河邊を吹風によせてかへらぬ浪かとぞ見る

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめ

てあそびける日、法皇御覽じにおはしましたりけり、

ゆふさりつかた、かへりおはしまさむとしけるおりに、

よみてたてまつりける

伊

勢

水の上にかべる船の君ならばこゝぞとまりといはまし物を

からことゝいふ所にてよめる

宮こまでひゞきかよへるからことは浪のをわけて風ぞひきける

ぬのびきのたきにてよめる

在原行平朝臣

こきちらすたきの白玉ひろひをきてよのうき時の涙にぞかる

布引のたきのもとにて、人々あつまりて、哥よみける

時によめる

なりひらの朝臣

猶別所  
船ども  
眞せ  
附け  
の  
香  
附

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちる袖のせばきに

よしのゝたきを見てよめる

承 均 法 師

たがためにひきてさらせる布なれやよをへてみれどとる人もなき

山そのけ行た師の法 師

新管の 題しらす

龍門にまうで、たきのもとにてよめる

山をいける 勢

勢

たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山姫の布さらすらん

朱雀院のみかど、ぬのびきのたき御覽せんとて、ふん

月のなぬかの日、おはしましてありける時に、さぶら

ふ人々に、うたよませ給けるによめる

たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布をたなばたに我心とやけふはかさまし

ひえの山なるをとほのたきを見てよめる

た ぶ み ね

おちたぎつ瀧のみななみ年つもりおいにけらしなくろきすぢなし

おなじたきをよめる

み つ ね



風ふけど所もさらぬ<sup>よ</sup>白雲はよ<sup>正</sup>をへておつる水にぞ有ける

田むらの御時に、女ばらのさぶらひにて、御屏風のゑ

御覽じけるに、たきおちたりけるところおもしろし、

これを題にて哥よめ、とさぶらふ人におほせられけれ

名詞ば

三条の町惟高親玉母

思せく心の内のたきなれやおつとはみれどをとのきこえぬ

屏風のゑなる花をよめる

屏風のゑなる花をよめる

つらゆき

さきそめし時より後はうちへて世は春なれやいろのつねなる

屏風のゑによりみあはせてかきける

さかのうへのこれのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなをこそわたれ秋のうければ

し

山田のいねのこきたれてなをこそわたれ秋のうければ

つらゆき

古今和歌集卷第十八

雜哥下

題しらず 歌評 強評

讀人しらず

の世中はなにかつねなるあすか河昨日のふちぞけふはせになる  
いく世し も あらじ我身をなぞもかくあまのかる も に思みだる も

鴈のくる峯の朝露はれずのみおもひつきせぬ世中のうさ

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくにことしあればまづなげかれぬあなる世の中

かひのかみに侍ける時、京へまかりのほりける人につ

かはしける

をゝのさだき

宮こ人いかとよはと山高みはれぬくもるにわぶとこたへよ

文室のやすひで、みかはのぞうになりて、あがた見に

三河橋ト

赴任

田舎見

あはれでたまじや

はえいでたまじや、といひやれりける返事に、よめる 小 野 小 町

わびぬればよをうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらす

あはれてふことこそうたて世中をおもひはなれぬほだしなりけれ

よみ人しらす

あはれてふことの葉ごとにをくつゆは昔をこふる涙なりけり

世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物は涙なりけり

世中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ

よのなかにいづら我身の有てなしあはれとやいはむあなうとやいはん

山里は物のわびしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり

これたかのみこ

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめばすみぬるよにこそ有けれ

ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへ世中は浪のさはぎに風ぞしくめる

あはれでたまじや

そせい

いづくにか世をばいとほむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

よみ人しらず

世中はむかしよりやほりかりけん我身ひとつのためになれるか

よのなかをいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出にけん

みよしの山あなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ

世にふればうきこそまされみよしのいはのかげ道ふみならしてん

いかならむ巖の中にすまばかほ世のうき事のきこえこざらん

鞆引の山のまにくかくれなんうき世中はあるかひもなし

世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれるゆきやけなまし

おなじもじなきうた

よのうきめみえぬやまぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ

山のほうしのもとへつかはしける 凡河内みつね

世をすて山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらん

Handwritten annotations in cursive script, including circled characters and vertical lines connecting text across the page.

生ひいつの竹

物思ける時、いときなきこをみてよめる

夏之邊

今更に何おひいつらん竹のこのうきふしうげきよとはしらずや

題しらず

都の都の道よみ人しらず

世にふればことのはしげきくれ竹のうきふしごとに驚ぞなく

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬべらなり

竹

ある人のいはく、たかつのみこの哥也

高津四親王

半

我身からうき世中となづけつゝ人のためさへかなしかるらむ

都の外の国

おきのくにうながされ侍ける時によめる

半縁ること

たかむらの朝臣

思きやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとは

田むらの御時に、事にあたりて、つのくにのすまとい

漁

ふ所にもり侍けるに、宮の内に侍ける人につかはし

たごる

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

左近將監とけて侍ける時に、女のとぶらひにをこせた

舞

舞



久方の中におひたる里なればひかりをのみぞたのむべらなる

きのとしさだが、阿波のすけにまかりける時に、むま

のはなむけせむとて、けふといひをくれりける時に、

こゝかしこにまかりありきて、夜ふくるまでみえざり

ければ、つかはしける

なりひらの朝臣

今ぞしるくるしき物と人またむ里をばかれず問べかりける

これたかのみこのもとに、まかりかよひけるを、かし

らおろして、をのといふ所に侍りけるに、正月にとぶ

らはむとてまかりたりけるに、ひえの山のふもととなり

ければ、雪いとふかゝりけり、しゐて、かのむろにま

かりいたりておがみけるに、つれづれとして、いと物

がなしくて、かへりまうできてよみてをくりける

○ 忘れては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは

深草のさとにすみ侍て、京へまうでくとて、そこなり

ける人によみてをくりける

年をへてすみこし里をいでゝいなばいとゞ深草の野とや成なん

返し

よみ人しらす

野とならばうづらとなきて年はへんかりにだにやは君はこざらん

題しらす

我を君なにはの浦に有しかばうきめをみつのあまとなりなき

この哥は、ある人、むかし、おとこありけるをうなの、おとこはずなりにければ、なにはなるみつのてらにまかりて、あまになりて、よみて、おとこにつかはせりける、となんいへる

返し

なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとのなる

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらして門させりてへ

ともだちの、ひさしうまうでござりけるもとに、よみ

てつかはしける

多敷

雑草

つね

とらへ

海入

長群

短群

見スト津ミロケ

何ク難波をロケ

夏目

假初

時



水のおもにおふるさ月のうき草のうきことあれやねをたえてこぬ  
 人をとほで、ひさしうありけるおりに、あひうらみけ  
 ればよめる

身をすて、ゆきやしにけん思よりほかなる物は心なりけり

むねをかのおほより、こしよりまうできたりける時に、

雪のふりけるをみて、をのが思は、この雪のごとくな

むつもれる、といひけるおりによめる

君がおもひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあらじとおもへば

返し 宗 岳 大 頼

君をのみおもひこし路の白山はいつかは雪のきゆる時ある

<sup>おもひ</sup>こしなりける人に、つかはしける きのつらゆき

おもひやるこしのしら山しらねどもひとよも夢にこえぬよぞなき

題しらず よみ人しらず

いざこゝに我世はへなむすがはらや伏見の里のあれまくもおし

*あまのこゝろ*

庵

わがいはほはみわの山本こひしくばとぶらひきませ杉たてる門

唐南子位

喜もり人

きせん法師

我庵は都のたつみしかぞすむよを<sup>う</sup>ぢ山と人はいふなり

然ぞ

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよの宿なれやすみけむ人のをとづれもせぬ

ならへまかりける時に、あれたる家に、女の琴ひきけ

るをきよて、よみていれたりける

よしみねのむねさだ

大まかきおぼろ  
くさくさ  
道八の意

わび人のすむべきやどゝみるなべになげきくはゝることのねぞする  
はつせにまうづるみちに、ならの京にやどれりける時

よめる

二 糸ほいたるの朝臣女

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうきなゝりけり

題しらす

よみ人しらす

世中はいづれかさしてわがならむ行とまるをぞやどゝさだむる

相坂の嵐のかぜはさむけれどゆくゑしらねばわびつゝぞぬる

風のうへにありかさだめぬちりの身は行ゑもしらず成ぬべらなり

家をうりてよめる

勢に

伊

勢

あすかゞはふちにもあらぬ我宿もせにかはり行物にぞ有ける

つくしに侍ける時に、まかりかよひつゝ、ごうちける

人のもとに、京にかへりまうできて、つかはしける きのとも のり

故郷はみしいとよきとともあらずおのゝえのくちし所ぞこひしかりける

女ともだちと、物がたりして、わかれてのちにつかは

しける

寛平

みちのくみちのくみちのくみちのくおが女

あかざりし袖のなかにやいりにけむわがたましひのなきこゝちする

侍斬 寛平御時に、もろこしのはう官にめされて侍ける時に、

東宮のさぶらひにて、をのことも、さけたうべけるつ

つひが  
なよ竹のよながきうへにはつしものおきみて物をおもふ比かな

置ま  
おき  
ふちはらのたよふさ

なよ竹のよながきうへにはつしものおきみて物をおもふ比かな

題しらず

よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつ田山よはにや君がひとりこゆらん

ある人、この哥は、昔やまとのくになりける人のむすめに、ある人すみわたりけり、この女おやもなくなりて、家もわるくなり行あひだに、このおとこ、かうちのくに、人をあひしりてかよひつゝ、かれやうにのみなりゆきけりざりけれども、つらげなるけしきもみえで、かうちへいくごとに、おとこの心のごとくにしつゝ、いだしやりければ、あやしとおもひて、もし、なきまにこと心もやある、とうたがひて、月のおもしろかりけるよ、かうちへいくまねにて、せんさいのなかくかくれてみければ、夜ふくるまで、ことをかきならしつゝ、うちなげきて、このうたをよみてねにければ、これをきゝて、それより又、ほかへもまからずなりにけり、となむいひつたへたる

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたの山におりはへてなく  
忘られん時しのべとぞ濱千鳥ゆくゑもしらぬあとをととむる

貞観御時、万葉集は、いつばかりつくれるぞ、とは

清皇の御

せたまひければ、よみてたてまつりける

文室ありすゑ

神な月時雨ふりをけるならのはの名におふ宮のふることぞこれ

寛平御時、哥たてまつりけるついでに、たてまつりける

飯多と先へと聲を傳つり

る

大江千里

あしたづのひとりをくれてなくこゑは雲の上まできこえつかなん  
人しれずおもふ心は春霞たちいでゝきみがめにも見えなん

希聖

哥めしける時に、たてまつるとて、よみて、おくにか

きつけてたてまつりける

早くの書 伊

勢

山河のをとにのみきくもゝしきを身をはやながらみるよしもがな

古今和歌集 枕詞

身と世別のみ

古今和歌集卷第十九

雑体哥

短哥

題しらず

あふことの  
あまぐもの  
おもへども  
わたつみの  
いたづらに  
かくなわに  
おもへども  
あしびきの

ト人の  
唐菓子

この集と河内

あふことかたし  
おきをふかめて  
なりぬべらなり  
おもひみだれて  
えふの身なれば  
山したみづの  
こがくれて

色物の意と  
色物の意と  
おのよ

よみ人しらず

なにしかも  
おもひてし  
ゆく水の  
ふるゆきの  
なをやます  
たぎつごころを  
おもひはいまは  
たゆる時なく  
けなばけぬべく  
おもひはふかし

あふことかたし  
おきをふかめて  
なりぬべらなり  
おもひみだれて  
えふの身なれば  
山したみづの  
こがくれて

あがたも清む

おのよ

和歌の集

古 和 歌 集

春 鳥

たれにかも  
すみぞめの  
なげきあまり  
しろたへの  
おもへども  
あはむとおもへば

ふるうたてまつりし時のもくろくの、そのなが哥  
千はやぶる  
あまびこの  
さみだれの  
なくごとに  
もみちばを  
冬のよの  
年ごとに

あひかたらはむ  
ゆふべになれば  
せむすべなみに  
衣のそでに  
なをなげかれぬ  
はるかすみ

神のみよより  
をとほの山の  
そらもとどろに  
たれもねざめて  
みてのみしのふ  
庭もはだれに  
時につけつゝ  
あはれてふ

いろにいでは  
ひとりゐて  
にはにいでゝ  
をくつゆの  
はるかすみ  
よそにも人に

さよふけて  
からにしき  
神なづき  
ふる雪の  
あはれてふ  
ことはいひつゝ

降雪あり

ら ゆ き

世々にもたえず  
おもひみだれて

山ほととぎす  
たつたの山の

しくれぐて  
猶きえかへり

ことをいひつゝ

おのれも人へおのれ

きみをのみ  
ふぢころも  
すべらきの

ちよにといはふ  
もゆるおもひも  
をれる心も  
おほせかしこみ

世の人の  
あかずして  
やちくさの  
まきくの  
中につくすと

いせの海の

玉のをの

うらのしほかひ  
みじかき心

ひろひあつめ  
おもひあへず

とれりとすれど  
猶あらたまの

としをへて

大宮にのみ

ひさかたの

ひるよるわかす

つかふとて

かへりみもせぬ

わがやどの

のぶくさおふる

いたまあらみ

ふるはるさめの

もりやしぬらん

のふくさおふる

ふるうたにくはへて、たてまつれるながうた

王 生 忠 峯

くれ竹の

よゝのふるごと

なかりせば

いかほのぬまの

いかにして

思こゝろを

のはへまじ

あはれむかしべ

ありきてふ

人まるこそは

うれしけれ

身はしもながら

ことのはを

あまつそらまで

きこえあげ

すゑのよまでの

大宮の好も詩言へし



あとしなし  
131

ちりの身に  
忠兼真研これをおもへばいにしへに  
けた物の

おもほえず

てゐひかり

くる方に

みかきもり

なかにては

ちかければ

なきくらし

せめらるゝ

しるせれば

わたくしの

年たかき

今もおほせの

つもれる事を

雲にほえけむ  
くすりけがせるだもの

ひとつこゝろぞ

ちかきまもりの

あざむきいでゝ

おさくしくも

あらしの風も

春は霞に

秋は時雨に

かゝるわびしき

いつゝのむつに

おいのかずさへ

ことのくるしさ

くだれるは

とはるらむ

こゝちして

ほこらしき

身なりしを

みかきより

おもほえず

きかざりき

たなひか

袖をか

身ながらに

なりにけり

かゆければ

かくしつゝ

ちりにつげとや

これをおもへば

ちゝのなさけも

かくはあれども

たれかは焮の

とのへもる身の

こゝのがさねの

今は野山し

夏はうつせみ

冬はしもにぞ

つもれるとしを

これにそはれる

身はいやしくて

ながらのはしの

若くなるはて

ながらへて

おほぐれん

しら山の

をとにきく

わかえつゝみむ

君が世に相坂山のいはし水こがくれたりとおもひけるかな

冬のながうた

ちはやぶる

はつしぐれ

山あらしも

こきちらし

庭のおもに

しらゆきの

つくしつるかな

なにはのうらに たつなみの

さすがにいのち おしければ

かしらはしるく なりぬとも

おいずしなずの くすりもか

願望

君がやちよを

なみのしわにや

こしのくになる

をとほのたきの

冬草の 凡河内みつね

神な月とや

もみちとゝもに ふるさとの

さむく日ごとに なりゆけば

あられみだれて しもこほり

むらくみゆる 冬草の

つもりくゝて あらたまの

けさよりは

くもりもあへず

よしのゝ山の

たまのをとけて

いやかたまれる

うへにふりしく

としをあまたも

延喜七年六月八日開卅六  
七條のきさきうせたまひにけるのちによみける  
勢

延喜七年六月八日開卅六

伊

勢

おきつなみ

いせのあまも

かなしきに

しぐれにて

わかれなば

花すゝき

はつかりの

舟ながしたる

涙の色

秋のみぢと

たのむかげなく

君なき庭に

なきわたりつゝ

宮のうち

こゝちして

くれなるは

人々は

なりはてゝ

むれたちて

よそにこそみめ

年へてすみし

よらむ方なく

われらがなかの

をのがちりく

とまる物とは

そらをまねかば

旋頭哥

題しらす

うちわたすをちかた人にも申すわれその所にしろくさけるはなにの花

返し

礼物

よみ人しらす

春さればのべにまづさくみれどあかぬ花さひなしにたゝなるべき花のなれや

題しらず

はつせ河ふるかはのへにふたもとあるすき年をへて又もあひみむふたもとあるすき

序

きみがさすみかさの山のもみちばのいろ神な月しぐれのあめのそめるなりけり

つら

ゆき

深き

誹諧哥

題しらず

梅花みにこそきつれ鶯のひとよみ人しらず

東也そよ衣

山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくれればか郭公しでのたをさをあさなくよぶ

七月六日、たなばたの心をよみける

いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらむ

待るの世

怪び言で  
題しらす  
男女の情流...

むつごとともまだつきなくにあけぬめりいづらは秋のながしてふよは  
凡河内みつね

僧正へんせう

秋のよになまめきたてるをみなへしあなかしがまし花もひととき

摘みみしらす

あきくればのべにたはるゝ女郎花いづれの人かつまでみるべき

秋霧のはれてくもればをみなへし花のすがたぞみえがくれする

花と見ておらむとすれば女郎花うたゝあるさまのなにこそありけれ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

御利せ

在原むねや

秋風にほころびぬらしふぢばかまつよりさせてふ恭なく

あす、春たゝむとしける日、となりの家の方より、風

のゆきをふきこしけるをみて、そのとなりへ、よみて

つかはしける

清原ふかやぶ

冬ながら春のとなりのちかければなかどきよりぞ花はちりける



春霞たなびくのべのわかなにもなり見てしがな人もつむやと

題しらす

よみ人しらす

おもへども猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじとおもへば

雄の平

定文

春の野のしげき草ばのつまごひにとびたつきじのほろゝとぞなく

きのよし人

秋のゝにつまなきしかのとしをへてなぞ我戀のかひよとぞなく

羽

重下備言

羽

み

ね

蟬のはのひとへにうすき夏衣なればよりなむものにやはあらぬ

た

ね

かくれぬのしたよりおふるねぬなほのねぬなはたてじくるないとひそ

登

根尾

菜能

よみ人しらす

ことならばおもはずとやはいひはてむなぞ世中のだまだすきなる

おもふてふ人の心のくまごとにたちかくれつゝみるよしもがな

備のト孤もしき人

ね

九  
十  
九  
九

思へどもおもはずとのみいふなればいなやおもはじおもふかひなし  
我をのみおもふといはどあるべきをいでや心はおほぬきにして  
われを思人をおもはぬむくひにや我思人の我をおもはぬ

おもひけん人をぞともにおもはましまさしやむくひなかりけりやは  
いでゆかむ人をとよめむよしなきに隣の方にはなもひぬかな  
紅に染し心もたのまれず人をあぐにはうづるてふなり

いとほるゝわが身は春の駒なれやのがひがてらにはなちすてつる  
鶯のこそこのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらん  
さかしらに夏は人まねさゝのはのさやぐしもよをわがひとりぬる

あふことの今はゝつかになりぬれば夜ふかゝらでは月なかりけり  
左のおほいまうちぎみ

もろこしのよしのゝ山にこもるともをくれんと思我ならなくに

な か き

あつち  
藤の  
たのた

くちの  
まゝ

賢  
あはれ

あはれ


あはれ

中  
興

僅  
三  
月  
と  
ま  
る

月  
と  
ま  
る



雲はれぬあさまの山のあさましや  の心をみてこそやまめ

*Tomonori*

*雲のたのしみ*

なにはなるながらのはしもつくるなり今は我身をなにゝたとへん

伊 勢

*真美*

*よみ人しらす*

*序*

まめなれどなにそはよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし

おきかせ

なにかその名の立ことの惜からむしりてまどふは我ひとりかは

いとこなりけるおとこによそへて、人のいひければ

よそながら我身にいとよるといへばたといつはりにけくばかりなり

題しらす

*糸のゆるるまき*

さぬき 安倍清行朝臣女

ねぎごとをさのみきゝけん社こそはてはなげきの柱となるらめ

*ねぎ* 輔流たすくが女

なげきこる山としたかく成りぬればつらづぬのみぞまづつかれける

*ねぎ*

*ねぎ*

よみ人しらす

歌の末のり

序 是り

なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなく成ぬべらなり  
 人こふる事を室行もにとなひもてあふ新こなき新こそわびしかりけれ  
 よゐのまにいでゝ入ぬるみか月のわれて物おもふころにも有かな  
 そへにととすればかゝりかくすればあないひしらすあふさ入さ新さ新  
 世中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ 住

在原元方

世中はいかにくるしとおもふらんこゝらの人に恨らるれば

よみ人しらす蓋ら蓋ずと

なにをして身のいたづらにおいぬらん年のおもはむ事ぞやさしき

おきかぜ

身はすてつ心をだにもは女ふらざしつゐにはいかゞなるとしるべく

千さと

白雪のとも到我身はふりぬれど心はきえぬ物にぞ有ける

題しらす

よみ人しらす

梅花さきてのゝちの身なればやすき物とのみ人のいふらん

法皇、にし川におはしましたりける日、さる山のかひ

にさげぶ、といふことを題にて、うたよませたまうけ

る

わびしらにましらなきそあしびきの山のかひあるけふにやはあらぬ

題しらす

世をいとひこのもとことに立よりてうつぶしぞめのあさのきぬなり

よみ人しらす

梅の花の香りに  
あはれ

うたよませたまうけ

うたよませたまうけ

古今和歌集卷第二十

大哥所御哥

おほなほびのうた

あたらしき年の始にかくしこそちとせをかねてたのしきをつめ

日本記には、つかへまつらめよろづ世までに

ふるぎやまとまひの哥

しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆる哉

あふみぶり

あふみよりあさたちくればうねのゝにたづぞ鳴なるあけぬこの夜は

みづぐきぶり

水ぐきのをかのやかたにいもとあれとねてのあさけのしものふりはも

しはつ山ぶり

伊勢物語の夜はの國も雪もあつた  
その雪も直ぐいことか  
尺直是神

雪は降る夜  
勢

しはつ山うちいでゝみればかさゆひの嶋こぎかくるたなゝしを舟  
神あそびのうた

とりものゝうた

霜やたびをけどかれせぬ神のままへに茂りあひにけり

まきもくのあなしの山の山人もみるかに山かづらせよ

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかづら色付にけり

みちのくのあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこしのびくぐに

我かどのいた井のし水さとゝをみ人しくまねばみくさおひにけり

さゝのくまひのくま川にこまとめてしばし水かへかけをだにみん

かへしものゝうた

あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ

阿武隈

まがねふくきびの中山帯にせるほそ谷川のをとのさやけさ

この歌は、承和の御べのきびのくにの哥

美作きくめのさら山さびにわがなはたてじよろづよまでに

これは、みつのおの御べのみまさかのくにの哥

みのよくに關の藤河たえずして君につかへむ萬世までに

これは、元慶の御べのみのうた

君が世はかぎりもあらじながはまのまさごのかずはよみつくとすとも

これは、仁和の御べのいせのくにの哥

おほとものくろぬし

あふみのかぢみの山をたてたればかねてぞみゆる君がちとせは

これは、今上の御べのあふみのうた

阿武隈

東 哥

みちのくうた

あふくまにきり立くもりあけぬとも君をばやらじまてばすべなし

阿武隈

みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなし  
わがせこを宮こにやりてしほがまのまがきのしまの松ぞこひしき

おぐろさきみつのこじまの人ならば宮このつとにいざといはましを  
みさぶらひみかさとまうせみやぎの木のしたつゆは雨にまされり

もがみ河のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり  
きみをよきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなん

さがみうた

こよろぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすなおきにをれ浪

ひたちのうた

つくばねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし  
つくばねの嶺のもみちばおちつもりしるもしらぬもなべてかなしも

甲斐かひうた

かひがねをさやにも見しけなくよこほりふせるさやの中山

かひがねをねごし山ごし吹風を人にもがもやことつてやらむ

きりり  
舞

廣の原  
舟

松の  
山

解  
の  
歌  
横  
は  
り  
歌  
と  
る

Song

おぐろ

みさぶらひ

待りの  
話

伊勢うた  
 伊勢うた  
 片夜  
 ぢめぢめのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはん  
 冬の賀茂のまつりのうた  
 藤原敏行朝臣  
 ちはやぶるかものやしろのひめこ松よろづ世ふとも色はかはらじ





家々稱證本之本乍書入以墨滅哥

今別書之

木を巻第十

物名部

ひぐらし

大言と造るべし  
木材の根

つらゆき

そま人は宮木ひぐらしあしびきの山の山びこよびとよむ也

在郭公下 空蟬上

勝 臣

思の素時

かけりても何をか玉のきてもみむからはほのほと成にし物を

をかたまの木 友則下

くれのおも

つらゆき

こし時とこひつゝをればゆふぐれのおもかげにのみ見え渡かな

をきの井 双草 利貞下  
みやこじま

をのゝこまち

をきの井てみをやくよりもかなしきはみやこしまべの別なりけり

からこと 清行下

火の春

そめどの あはた

あ や も ち

うきめをばよそめとのみそのがれゆく雲のあはたつ山の麓に

このうた、水尾のみかどの、そめどのより、あはたへうつりたまうける時  
によめる

桂宮下

卷第十一

奥山のすがのねしのぎふる雪下

けふ人をこふる心は大井河ながるゝ水にをとらざりけり

わざもこにあふさか山のしのすゝきほにはいでもこひわたるかな

卷第十三

こひしくばしたにをおもへ紫の下

いぬかみのもとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな

この哥、ある人、あめのみかどの、あふみのうねめにたまへると

返し

うねめのたてまつれる

あやまち

不知

山しなのをとほのたきのをとにだに人のしるべく我こひめやも

卷第十四

おもふてふことのはのみや秋をへて下

そとほりひめの、ひとりゐて、みかどをこひたてまつ

りて

わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

深養父、こひしとはたがなつけゝむ事ならん下 つ ら ゆ き

道しらばつみにもゆかむ住のえの岸におふてふ戀忘草

和歌集  
卷第十四  
おもふてふことのはのみや秋をへて下

「おきねとぞいふは言ひしありぬし  
」のとは、いふは答えし

立田門 たらは君の 心を憐れみ  
いほの柱の いほとぞ思ひ

此集家々所稱雖說々多且任師說又加了見爲備後學之證本手自書之近代僻案之輩以書生之失錯稱有職之祕事可謂道之魔姓不可用之但如此用捨只可隨其身之所好不可存自他之差別 志同者可用之

嘉祿二年四月九日

戶 部 尙 書判

于時類齡六十五寧堪右筆哉

此一帖以家本令書寫校合訖尤可爲證本矣

左近中將爲邦<sub>朝</sub>